特63
725

宮内省圖書寮

醒

睡

第三編

梵

明治
44. 1. 7
宮内

およその事、友を得ざれば成しうべからず。只だ讀書の一事は、友なくてひとり樂しむべし。一室の内に居て、天下四海の内を見、天地萬物のことわりをしる。數千年の後にありて、數千年の前を見る。今の世にありて、古への人に對す。我が身おろかにして、聖賢にまじはる。是れみな讀書の樂なり。凡そよろづのことわざの内、讀書の益にしくなし。然るに世の人これを好まず、其の不幸甚だし。これを好む人は、天下の至樂を得たりと云ふべし。

（貝原益軒）

丁未文庫發刊の主旨

丁未出版社は社名に因める丁未文庫の稱を以つて、貝原益軒が樂訓を手始に、或は百種或は五百種と初めより約束がましきことはせねど、社力のつゞくかぎり、傳へて國の寶たり、また其の寶とすべきやうなる古人が名著の類を校訂續刊せんとす。

ビコンスフィールド卿は『人類未曾有の最大不幸は印刷術の發明にこそ』とて、愚書惡書の出版日に月に多きを呪ひたり。また泰西の哲人は、書は十年の生命を保ちたるものならでは讀むべからずと誡めたり。

十年の命はおろか、やがて紙屑屋のカン〳〵に計られんが爲に印刷せらるゝ書のいかに多きかな。されど十年は云ふに及ばず、百年二百年乃至五百年、千年の久しき間、人に讀まれ、世に傳へらるゝ書籍の類また多く、これ等に至りては不窮の生命を有し、國亡びて山河草木獨り綠なるも、希臘羅馬の書はなほ不滅に存す。これ等こそはカーライルが云へる人類の有する珍寶なり。

シクラスが希臘シーブスの圖書館の扉に銘して『靈魂の藥餌』と謂へるは、此等生命ある書のことなり。益軒が『天下の至樂を得たり』と謂へるも、これ等の書に對するときのことなり。

而して此等の生命ある大著名篇の類にいたりには、これに各種各

樣の新粧をなさしめて、絶えず世に出だし、讀書人に勸めんこと、なほ沙翁、ミルトルに數千百種の版本あり、而も年に月に諸方の書肆より新版せらるゝが如くならんことは、出版者が名著珍籍に對する責任なりとす。

丁未文庫は、我が國の寶として傳はり來れる書籍の中につきて選擇を加へ、而して讀書人の伴たり易からしめんことを期す。世の古書を飜刻するもの、往々古書に對する敬意なりとて、ことさら傳寫の誤字、假名遣の誤謬、態とらしき當て字などまでも保存するあれど、これは古書に對しても、また讀書人に對しても不親切千萬なりと謂ひつべし。丁未文庫は卽ち之れに異り、假名遣、送假名、てに

をはの誤れるは、成るべく文部省の假名遣法に從ひて嚴重に訂正を加へ、また假名綴を多く眞字に改め、且つ總振假名にするなどして、現時の讀書人に讀み易からしめんやうにせり。このころ袖珍文庫の類の續々出版せらるゝ時、其の尻馬に乘りて、後れ馳せに出かけたる、この丁未文庫の特色と云へば、以上あら〳〵述ぶるが如きものなり。

出版者しるす

小引

德川家康世を取りて、幕府三百年の大業を創め、元和偃武の政治を定めたるころ、京都に安樂庵策傳といへる洒落僧あり、誓願寺に住す。俗名を平林平太夫と云ひき。かれ滑稽頓智の妙に達し、さまざまと可笑しき雜語をりて、人の頤を解かせたり。當時京都所司代として賢明の聞え高かりし板倉周防守重宗また、策傳が笑話を喜びたる一人にして、其の子重郷また十歳ばかりの頃、父に侍坐して、之を聞くを樂しみたり。後に至り重宗の望みに任せ、その笑話を輯め八卷の書とし、醒睡笑と題して、寛永五年之れを贈れり。その由

醒睡笑序

ころはいつ、元和九癸亥の稔、天下泰平、人民豐樂の折から、策傳某、小僧の時より耳にふれて、おもしろくをかしかりつる事を、反故の端にとめ置きたり。是の年七十にて誓願寺乾のすみに隱居し安樂庵と云ふ、柴の扉の明暮、心をやすむる日毎々々、こしかたしらせし筆の跡を見れば、おのづから睡をさましてわらふ。さるまゝにや是を醒睡笑と名付け、かたはらいたき草紙を八卷となして殘すのみ。

來は書後の奥書に示すが如し。策傳は寛永十九年正月年八十九にて歿す。

醒睡笑の集むる笑話の類は、文は古雅、話は上品、その語り口の淡泊なるところに、却つて滑稽の妙味あり。後世の落語なるものは、多くは、この醒睡笑を燒直しまた燒直しては、次第に野鄙に流れたるものならざる無し。

丁未文庫は、『醒睡笑』八卷中につきて、その最も優れたるを選び、附するに『輕口浮瓢箪』の拔萃を以てす。これまた落語の上品上乘なるものなり。

目次

醒睡笑

謂べは謂はるゝ物の由來……一
ふはとのる……一四
鈍副子……一八
祝ひ過るも異なもの……二五
名づけ親方……三二
貴人の行跡……三三
うつけ……三九

吝太郎……五〇
賢だて……五六
文字知り顔……五九
不文字……六二
自墮落……六四
聞いた批判……七二
そでない合點……九七
唯有……一〇三
姦心……一〇六

上戸……一一六
人はそだち……一二〇
兒の噂……一二二
詮ない秘密……一二六
椎はちがうた……一二八
うそつき……一三五
似合うた望……一三九
廢忘……一四二
謠……一四四

頓作……一四九
秀句……一六〇
祝ひ濟んだ……一六三
輕口浮瓢簞……一七一

醒睡笑

安樂庵策傳編

謂へば謂はるゝ物の由來

○そらごとを云ふものを、などうそつきとは云ひならはせし。されば、にやうそといふ鳥、木のそらにとまりゐて、琴をひく緣にせよ、そらごとをうをつきといふよし。

○よろづ物のむさき事をきたないとはいかに。北は水の方なり、水なければ萬物きよからず。しかるあひだ水ないといふになぞらへ、

きたないといふかや。

○河内の國に珍といふあり、大和に場といふあり。二人ながら兵法の上手なりしが、ある時しあひをし、雙方片足おとし落され、既に死にのぞむ時、金瘡の上手とて來る。あまり慌てふためき、其のぬし〳〵の足をばとりちがへ、我が人に、人のを我がにつぎかへたり。さるまゝ一人は足ながくなり、一人は足みじかくなり、腰をひきしより、今もかゝるありきの人をちんばとはいふよし。

○山城の國伏見のつゞきに、法性寺といふ在所あり。人此の處をば何とて寺の名をよぶぞや。老いたる男出合ひ、さる事の候。昔此地に庄屋あり、彼れ燒米をすいて食ひ、終日かみくたびれ、頰ふくみ

ながらねいりたり。鼠にほひをたよりくひやぶり、大きに口をあけけり。其の時地下の者どもとぶらひくる中に、金瘡の上手あり、風を引いてはあじかりなむと、先づ障子を折りて疵の口に立てしより、はふしやうじとはいふなり。

○鬼に瘤とられたといふ事なんぞ。目の上に大いなるこぶをもちたる禪門ありき。修行に出てしが、ある山中に行暮れて宿なし。古辻堂にとまれり。夜すがらに三更におよぶ。人音あまたしてかの堂に來り、酒宴をなす。禪門おそろしく思ひながら、せんかたなければ心うきたる顏し、圓座を尻にのけ立ちてをどれり。明けがたになり天狗どもかへらんとする時いふ、禪門うき藏主にしよゝ伽なり、今

度もかならず來たれと、約束ばかりは偽りあらん、たゞ質にしくはあらじとて、目の上の瘤を取つてぞ行きける。禪門たからをまうけたる心地し、故郷に歸る。見る人かんじ、親類歡喜する事はかりなし。

○へちまの皮とも思はぬとは、紀の國の山家に、大へち小へちとて峯たかう、岸けはしくつゞらをりなるつたひ道、人馬の往來たやすからぬ切所あり。彼のあたりにつかふ馬は、糠につけ、藁につけ、大豆などは申すにおよばねば、實に骨ばかりなる樣なり。さるほどにかしこの馬、皮を剝いても、せのあと瘡の跡疵のみなり。何のやくにもたゝぬ物を、へち馬の皮とも思はぬ事にいふならん。

○世間に下手なる者を饂飩くらひと云ふ事は、けしからずうどんをすく者あり。さすが買うては食ひともなし。利口になき坊主にむかひ、そなたわが髪を剃りてたびらへ。もし切られらはゞ饂飩をふるまはれよ。難なく剃られたらば、我ふるまはんといひあはせ剃らるるに、はや切らずに剃りはてんとするつがひにふと立ち、少し切られんとしければ、耳を一つおとされたり。腹をば立てゞ結句よろてびぬるは、めづらしきうつけなるかな。

○あわてふためき、前後を忘じたるを、とち目になつて尋ねたは、とちめになりて走りありきたるはなどいふことなんのゆゑぞや。昔あるもの木から落ちて、目をつきやぶり悲しめば、人かれをあはれ

み物をとらする。さるほどに初めよりも富貴になりぬ。うつけ是れを見、羨ましき心は出來、態と山に行き無理に落ちたれば、不思議に大いなる岩に頭のあたり打割り、目の玉ぬけたり。さぐりて見、肝をつぶし、玉をたづね這ひまはるに、折ふし橡一つ手にあたるを玉とおもひ押入れたる。ほんの玉にはなかりしをいれたれば、とちめになりたる事よ、あまりいたみ悲しみ泣きゐければ、とちほどの涙をながすといふよし。

○遣唐使もろこしにある間に子あり。日本へ歸る時、妻に、此の子乳母はなれん程には、迎へ取るべしと契りて歸朝しぬ。遣唐使の來るごとに、消息を尋ぬれど音なし。母大いに恨み、兒の首に簡をゆ

ひつけ、緣あらば親に逢ひなんと、海になげ入れ歸りぬ。父難波の浦を行き、沖より浮びて物の見ゆ。馬をひかへて見れば、四つばかりなる兒なり。大いなる魚の背にのれり。取らせ見ければ札あり、我が子にこそありけれ。いひちぎりし兒をとはぬを、母が腹立て、海になげ入れしが、緣ありて魚にのり來たるなめりと、哀れ覺えいみじう悲しくて養ふ。此のよし書きやりたれば、母も聞きて今はなき物にと思ひけるに、希有の事とてよろこびける。此の子おとなになり、手をよく書けり。魚にたすけられたるゆゑ、名を魚養とぞつけたる。七大寺の額どもはこれが書かきたるなり、あなおもしろの出來や。

○旦九郎といふ兄あり、性鈍にて富めり。田九郎とて弟あり、性さがしくて貧し。あるとき弟釜を求め、庭にて湯をわかす。たぎりゐける處へ兄來るに、其の釜をぬき、出居の火もおかぬ路にかけぬ。旦九郎見つけ、是れは火も無うてたぎる事如何にとあれば、弟それこそ此頃來り候ふ火もなくて湯のわく寶なれと語るにぞ、兄きもを潰して金十枚に買ふ。金をわたして後あらひてかくるに沸かず。腹立たしといへば、其の儘水を入れ給はゞわき候はん。物あらはせ給ふたほどに、今からは湯わくまじきとて歸りぬ。又たある時馬を一疋かうて繫ぐ。其の馬屋に金を二枚入れて置けり。旦九郎來り、馬はいづれよりと問ふ。弟申しける、是れこそ世にためしなき名馬に

候へ、三日に一度はかならず金を糞に仕り候。又た虚言をつくとて叱る。馬のゐるあたりを御見せ候へと、人をして見するに黄金あり。今はうたがひなし、われにくれよ、其の價金子五十枚つかはさんとてもらひたり。馬屋の結構にしたるに、兩たづなにつながせ、今や〳〵とまつに、其の樣子なし。大いに嗔つて、田九郎を呼び責むるに、いや〳〵板の上につながれし故、心たがひてあり。此の後は中々奇特あるまじきとぞ申さる。是れよりうつけを旦九郎とは云ふなり。

○娘ひとりに聟三人と云ふ事は、昔富める人のむすめをもちたりしが、ある時舟あそびに出てゐ。如何したりけん、娘ふなばたを蹈み

はづじ、水に落ち入りぬ。父母おどろき、懸の高札を打つやう、此の娘を助けたらんを必ず聟にせんとあり。占ひする者來り、いづくのほどに其の姿ありと敎ふ。又た河だちの上手一人來り、我れ取りあげんというて卽ちいだきあげたり、されども息たえてなし。時に醫者來り藥をあたへ二度蘇りぬ、其の後卜人云ふ、我れ始め娘のあり處を云うてあればこそ、とりあげたれ、婿にならん。又た水練が云ふ、我れ抱きあげずんば、なんとして蘇生すべき、我れ婿にならん。又たくすしいへらく、我れ藥をあたへずんば、爭て二度壽を保つべき、我れ婿にならんとあらそひ、所の地頭に伺ひければ、批判左右なく濟まず。終には都にのぼり、多賀の豐後守に義をうけけれ

ば、さる事あり、欲界に生をうくる者、凡そ三百六十種としるせる中に人これが長たり。婚合の法、形をまじふるにあり、しかる時は水練者娘に身をそへ、膚をふれたり、是れをこそ尤も婿にとるべきと掟しぬ。

○世話に鬼味噌と云ふはなんぞ。ある山寺に修行底なき僧、老年を久しく住せしが、かれ圓寂の後、看坊をすゆるに、一夜をあかして見れば跡なし。いくたりも右のごとくなるまゝ、恐れて彼の寺に住せんといふ者なし。ある時行脚の比丘來るに、件の旨を語りきかする。卽ち我れゐてみんといふ。あないたはしや、またとられん事よとは思ひながら寺をわたしぬ。件の看坊しん〳〵と座す、三更の後

僧一人來れり。そちは誰ぞ。我れは此の前住なりと。汝世を去つてほどありと聞く、如何なれば再來する。我れ汝をあはれみ、一鉢の飯をあたへんためと。不思議や亡魂の作法に終にきかずといふ。彼の靈、我れは鬼にもなり、畜生乃至食物にも神通無碍なりと語る。さらば湯づけを出し、燒味噌をそへてふるまはれよ。やすき事と身を變じ、燒味噌となりしを、口へ入れ一嘗にしけり。其の後は彼の寺になにの祟もなければ、案の外煩ひなく住みぬ。此のいはれにより、音は恐しく左右に聞え、させる手柄も奇特もえせぬものを、あれは鬼味噌ぢやと一口にはいふよし。

○娑婆で見た彌次郎かともいはぬとはなんぞ。いにしころ佐渡の島

銀山出來、人多くあつまりぬ。其の時一人の聖ありて、十穀を斷ち禁戒を守り、六時不退の稱名たゆむ事なく、生佛とはこれならん、參れや、拜めやとて晝夜のわかちなく、男女袖をつらぬる中に、彌次郎といふ者、其の道場をはなれず給仕しけり。彼の聖、年月を經てのち頻に入定せんと披露する。おの〳〵落涙し名殘をしむ。來る廿日をかぎり時を定め、山の原に大いなる穴を掘り、法衣を着し入りすまし、外より土をよせ、かたく埋みをはんぬ。奇特なる行狀なりし。かたはらに沙汰するを聞けば、金掘を賴み過分に物をとらせ、ぬけ道を掘りおき、其の身は恙なく行ひうせたるなどいふ者もありけり。斯くて三年を過ぎ、彼の聖を信仰せし彌次郎、越後に渡

り、さる所にて件の聖にあひぬ。疑ふべくもなし。すなはち近くより、そなたはそれではなさか。聖、いやそちをば夢にもしらぬ、我れはさういふ者でなしと爭ふ。俗あらくかに證據をひき叱る時、かの聖、げにも〳〵よく思ひあはすれば、裟婆で見た彌次郎かと申したりき。それより此の言葉はありといふ。

ふはとのる

○忿怒の前には、不動劍を引提げて降魔の儀をしめす事あり。されば昔五山の僧に、幸藏主とて兵法の道に達せし人あり。都にのぼる蓮者みな一打二打うたぬはなかりしに、或時奥山流の兵法者上

洛しけり。例のごとく仕合の日さだまりぬ。京中知るも知らぬもとく〳〵しく物見に出るに、幸藏主は鑓、兵法者は太刀にて對ふ。鑓をさつと振りすますを見て、其の儘太刀をなげすて問訊しけり。こは何事ぞやととへば、幸藏主の鑓先より火焔出でたり、活身の摩利支天なり、貴さに太刀をすつといひければ、幸大いに悅喜し、自らすすめて彼の兵法者に弟子どもあまた引きつけたり。のせすまいた上手。

○仁物らしき男、枕の前後に鯛を入れにないひ、鯛は鯛はと賣りけるを、ある家のぬしよび入れて、はしからずさむき日なり。まづちと火にもあたり、茶をも飲みておとほりあれ。ちらと一目見しより、

これはたゞならず、古へはさもありし御身なりしが、思はずも世におちぶれてかゝる業をもし給ふにやと、涙をこぼし候ひぬといひければ、しづかに火にあたり、茶など飲みて、立ちさまに大いなる鯛を一つ亭主がまへにさし出したり。こはなにとしたる事と斟酌しければ、いや今日は心ざす先祖の頼朝の日なり。

○奉公人のはてとおぼしきが宿をかり、四方山の事を語りつくしけり。亭主ほめて、いかさま只だの人とは見え候はず、もはや休み給へ、夜着をまゐらせんやといふ。いやいかほどの野陣山陣をしつも、せう〳〵寒き事をば知らず、無用というて着のまゝいねけるが、夜ふくるにしたがひ、ひた物寒し。時に亭主〳〵、こゝの鼠には足を

あらはせたるかと問ふ。いやさやうの事はなしと答ふ。それならば莚を一二枚きせられよ、鼠が着た物を踏まば、むさからうずにと。

○十ばかりなる娘の容顔美麗なるに、女房達二三人打ちそひて居けるを人みつけ、是れはこなたの御息女に候ふや、さて〳〵いつくしさ計りなき花のかたちは、名に聞きし揚貴妃、李夫人もかくこそありつらめなど褒めければ、親父是れを聞いて、さればよ此の娘はそのまゝ母の顔ぢやと。

鈍副子

○日本一の鈍なる弟子が師のうはさをいふやう、坊主のいつもいろ

〈の事をいうて叱らるゝ中に、近頃聞えぬ無理を三つ云はるゝ。一つは先づ、おのれをなんばうの辛苦にて人になないたと仰せある。我れが犬の子にでもあらばこそ、性得人の子にてあるを、人にないたとは何事ぞや。二つはいかほど氣をつくして經を教へし、その恩を仇に思ふとの折檻。これもいはるゝ所道理にてはあれども、其の習ひよみたる經を一字もわれがおほえばこそ、みな忘れ果てたるまゝ、小しも恩とは思はぬなり。三つは寺屋敷、資財雜具殘りなく汝にとらするはと仰せあれども、これまた少しも恩とは思はぬ。むづかしいに取つておかへりあらうまてよ。さあれば三つながら一つも坊主の道理はないと。

○ある寺の院主に知音の人ありて、門前までおとづれられけるを、弟子出で見つけ、そのまゝ方丈に行き、ものゝ御出でにて候ふといふ。院主大いに腹をたて、ものとは誰が事ぞ、さてもうつけをつくす奴かな、いざわれ出て見んとて、窓よりそと覗き、つくゝ見るに、顔ばかり覺え、つひに名をばうち忘れ、弟子に向ひ、まことにものぢやよといへり。

○洛陽にて淨土宗の寺へ、ある尼公の參られ、一人の弟子をよび出し、十念を受けたきよし披露してたびらへとありしかば、心得たりとて方丈に行き、下京にて何といふ人の女人の參りにてと申しもあへぬに、長老はを出し、上臈とか、女房とこそ申すべけれ、女人と

いふ事やあると、大に叱らる。弟子の返答に、そなたは我れに阿彌陀經を教へて、善男子、善女人といへというておいて、今はまたさういはぬとは、一事兩樣なる事をなどさん〳〵にからかひて表へ出てける時、尼公赤面し、笑止やお機嫌のあしきおとす、下向せんやと申されたれば、弟子いふ、いや苦しうも候はず、ちと女房ごとの出入て御座あると。

○小僧あり、小夜ふけて長竿をもち、庭をあなたこなたと振りまはる。坊主これを見付け、それは何事をするぞと問ふ。空の星がほしさに打落さんとすれども落ちぬと。扨て〳〵鈍なるやつや、それほど作が無うてなる物か、そこには竿がとゞくまい、屋根へあがれと。

○一ばん聟殿、舅の方へ初めて行きたるに、友の教へけるやう、初對面に物をいはずば、うつけとこそ思ふべけれ、相構へなにとぞ時宜をでかせよ。心得たりとうけゝみつるが、一言の挨拶もなし。既に座を立たんとする時、聟殿がいひ出すやう、なにと舅殿は一抱ほどある鳴を御らんじた事はおりないか。いや見たる事はおりない。私も見まゐらせぬと。

○大客のあらんよしを舅聞きつれ、俄に造作をする故、材木をえらばず、節穴おほしとて氣の毒に思へり。彼の娘夫に教ふるやう、見舞にゆかれんに、節穴の事を申されば、短冊や色紙にて張りたまへといはれよ。尤もに思ひ行く。案のごとくの時宜なりき。舅大き

によろこび、此の年月聟をうつけといひつるはうそやと。其の後舅に腫物出來たり、又た見舞に行き、見參らして、若し藥を知り給はめや。唯だ腫物の上に短冊色紙をおしたまへと。

○人くらひ犬のある處へは何とも行かれぬとかたるに、さることあり、虎といふ字を手の内に書いて見すれば喰はぬとをしふる。のち犬を見、虎といふ字を書きすまし、手をひろげ見せけるが、何の詮もなくほかと食ひたり。悲しく思ひ、ある僧にかたりければ、推したり、其の犬は一圓文盲にあつた物よ。

○京にてくちわきしろと男、ちと出家をなぶり、りくつにつめて遊びたやと思ひつゝ、さがしき人に向ひ問ふ。やすき事なり、をしへ

む。なむぢ沙門にあうた時、お僧はいづくへといふべし、さだめて風にまかせてといはれんずる。其の時風なき時はいかんといへ、やがて閉口すべし。此のをしへの後、ある朝東寺の門前にて出家に行きあふ。お僧はいづくへといふ。僧の返事に、立賣の勘介が所へ齋に行く、なにぞ用ありや。男とつてにはぐれ、あらお僧は風にはおまかせないのと。

○越中の井見の庄殿といふ大名あり、世に勝れたるうつけなりし。母儀常に悔み歎き給ひしが、ある時の見參に、笑止や、そなたを内の者あなどり、何事もいひたきまゝにいうて、道なき作法と聞く。ちと折ふしは齒をもぬき折檻もあらば、さほどてまはあるまじき物

をと教訓あれば、心得たりとうけごひ、是非ともに一歯ぬかん物をとたくまれし。去る程に八朔の禮とて諸侍出仕あり、家來の人申す樣、今日の御祝義千秋萬歳、ことに天氣好くといはふなかばに、彼の大名、なにと御祝義天氣もよしと、左右いひたさまゝにはいはせまいぞ。

○田舍より主從二人始めて上洛し、京の町に逗留せし。休息の後見物に出る。下人にむかひ、都はいづれも同樣なる家作なり、よくよく目じるしをせよと教ふる。心得たりと領狀せしが、晩にのぞみ宿を知らず。主腹をたて叱る。返事に、いや門の柱に唾にて書付をたしかに仕りしが、消えて見え候はず。其の上になほ念を入れ、屋根

の上に鳶の二つありしを、目付にしたりしが、それもゐないで見えぬと。

祝ひ過ぐるも異なもの

○しけからず物毎にいはふ者ありて、與三郎といふ仲間に、大晦日の晩いひ教へけるは、今夜は常よりとく宿に歸り休み、あすは早く起きて來り、門をたゝけ、内より誰そやと問ふ時、福の神にて候ふとこたへよ。すなはち戸をあけて呼びいれんと、懇にいひ含めての ち、亭主は心にかけ、鷄の啼くと同樣に起きて、門にまちゐけり。あんのごとく戸をたゝく、たそ〳〵と問ふ。いや與三郎とこたふが

無興。やう〳〵ながら門をあけてより、そこもとに火をともし、若水を汲み、爐をすゆれども、亭主かほのさまあしくて、さらに物いはず。仲間ふしんにおもひ、つく〳〵思案しゐて、よひに教へし福の神をうちわすれ、やう〳〵酒を飲むころに思ひ出し、仰天し、膳をあげ、座敷を立ちざまに、さらば福の神と御座ある、おいとま申しまゐらするというた。

○和泉國に寺門といふ在所あり。一人の百姓名を好みてびんばふとつきたり。又一人は夷とつく。其所の地頭、元日に若しびんばふ禮始にや來たらんといやがり、出ちがひて氏神へ參りしが、下向する道にて、夷に行きあひたり。夷はどちへ。そなたより出て參ると。

あら氣がゝりやと歸りゐたれば、また貧乏に行き逢へり。貧乏はどちへ、殿へ參ると申しつる事よ。忌といふ字は己が心とかきたり。

びんばふの神も出雲に行くならば、
十月ばかり物は思はじ。

○貧乏神とわりなき知音の者ありしが、ちと酒にゑひて壁にもたれ居眠りしけるみぎり、肩から物がなにとも知れずどうと落ちけり。目をさまし手をあはせ、やれ〳〵嬉しい事や、此の年月肩にゐたる貧乏殿が、今日といふ今日おちて、我が身をはなれたよと合點せしが、誰いふとも知れず、あさり多くよりあひ、そちがゐねぶりするあひだ、油べうしを蹈むとてとりはづし、ひとり落ちにき、いまだ

果てはないぞといへり。なにと心にいはうても笑止や。

○窮貧の者ありて五つ六つなる子にむかひ、あす元日の明がたに、われ〳〵錢を手にもち、目にあてゝゐる時、あれとゝの錢のなかから目を見出いて御座あるはといへと、ねんごろに教へおき、あけの日、錢を目にあてゝ息子が方を見れども、幼ければ忘れはて、夢にだも思ひ出ださず。あまりたへかね、指にて錢のまねをし、しきりに千代松よ、夕べから教へたる事をいへといふ時、ちとかたちを思ひ出して、とゝの、穴の中から目見だいてやといふたる、その年秘所へ行く。

○江州坂本の侍あり、元日の夜、湖をひき傾けて呑むとの夢見る。

目さめて思ふ、水は方圓の器にしたがふなれば、おもふに思ふ事かなはんといふつげなるかやと、此の心うらにてよかりし物を、わが身は比叡の山颪に吹かれ、行道とほく、占方の上手といふにたちよりぬれば、清明流の博士、まづ夢の相をお語りあれ、其の言向にたより吉凶を申さんと。件の樣をありの儘なり。時支干をかんがへ、調子をはかり、書籍を卷いつ開いつして、あげくに、まづ案じても御覽ぜよ、寒夜には水を一口二口のむだにもあるに、湖水をみなのむとあれば、よきに養生なされよ。大略腹を煩ひ給ふ事あらんと申しあへり、無興の。

○元三をいはひ、膳部とりあつめ、目出たいなと、いろ〳〵したゝ

めてすわりぬ。盃あなたこなたとめぐるなかば、十ばかりなる惣領、ふと座を立ち、親の汁に殘れる鯛のかしらをとりて、手がひの犬をよび、これはとゝの頭ぞくらへといふに、七つ八つなる娘の走りゆき、母のくひ殘せる魚の骨をもちて出で、これはかゝの骨ぞ、くらへといひし、無興の。

○町人のものいはひするあり。大晦日に薪を買ひ、庭なる柵につませけるが、なにとやらん崩れさうなり。亭主あやふき事に思ひ、下主にむかひて、もし五ヶ日の内にあれなる薪が崩るれば、くづるゝといふな、薪がめでたうなるといへと教へけるが、はたして元三の畑をいはふ時、崩れかゝれり。下主なる與二郎、薪がめでたうなる

はとよぶ、與二郎はしり來り、まかせておけ、與二郎がをらう間はなにともあれ、めでたうはなすまいぞと。

○人にすぐれて物いはふ侍、今夜の夢に梟が家の内へ飛び入りたると見たわとあれば、被官の候ふて、それは目出たし、鬼は外へ、ふくろは内へと申しならはして候ふほどにといへば、侍大いに悅喜し、小袖を一重つかはしけり。如何にも鈍なる朋輩是れを見、我にも夢物語せられよかし。氣にあふやうにいふて小袖をとらん物をと思ひゐるつるが、彼の主人ある朝、又た此のゆふべ、われがあたま落つる〳〵と夢見たはとかたるに、彼の鈍なる男ふと出でて、それこそ目出た、まさ夢〳〵とぞ申しける。

名づけ親方

○いろはをも知らぬこざかしき俗、ある東堂の座下にまゐり、われ年もなかば更け、幼名にてもいかゞに候。なにとぞ左衛門か、右衛門と、名をつきたきよし望みしかば、東堂、大かたそちのつきたいと思ひよりたるをいうて聞かせよとあれば、さらば日本左衛門とつきたきよし申しけり。東堂あざわらつて、さやうの大きなる名はめづらし過ぎて、愚僧まで人の褒貶せんずるはいかにとあれば、くだんの男、いやあまり大きなる名とは存じ候はず、とう左衛門とつきたるさへ御座候ふは。

○豊前の國の大守長岡越中守殿、京より壁ぬりの上手を一人つれて下向あり、過分に知行をも給はりしかば、仕合比類なし。とてもの義に名字を下され、名をつき替へたき旨懇に申しければ、心得たり、一段望神妙なり、かくこそあるべけれ、つけてやらんとて、寸莎藁の朝臣鏝次下地壁右衛門と、奇妙々々。

○かたのごとく人のもてはやす侍ありしが、いろはよりほかには假名書の文をさへ讀むことなし。ある時地下人參りて我が名をかへたきよし望みければ、例のいろはをかたはらにおきて、いひやうゑとつけふかや。いやそれならばろひやうゑとやつけん。いやはひやうゑ、にひやうゑ、ほひやうゑとつくれども、いや只だいますこし

長うて、はねた名をつけたう御座あると申したれば、さらば、へとち左衛門とつけうずといへり。

○年八旬にあまり、はじめて男子をまうけ、悦びかぎりなし。ある東堂のもとにつれ行き、優曇華の花まち得たる心ち候、此の子に名をつけてたびらへかしと申しければ、やすき事とて千代もとつけゝり。老父なゝめならずに思ひ、宿にかへり、あたりの人をまねき、酒などもりながしけり。其の座の中にまた東堂へ出入る者ありて、千代もとつけられし仔細を如何にと問ひし時、さればとよ、八十にあまりての子なれば、ぬしが子であるまい、たゞ人の子にてあらんと思ひ、さてちよもとはつけたよ。業平の歌に、

世の中に、さらぬわかれのなくもがな、
ちよもといのる人の子のため。

とあるはとの返事なり。

貴人の行跡

○大閤の御時、二徳といふ者別して御氣に入りたり。ある朝生鶴の汁をくはせんとあれば、愛宕精進をいたす、下されまじきと申上げる。おのれがしゆつな、何事を祈るぞ。私はたゞ大閤樣の御宿願に候。何事をいのるぞ。臆病にならせらるゝやうにまもらせられよと。臆病でよからんことは。さればあまり命しらずに、鐵砲のさき

へもかまはせ給はねば、若しあたりて果てさせられては、私はなにとならうと存じてと申上げければ、さもあらんとの御氣過ぎなりし。

慈悲の目に、にくしとおもふことはなし、

とがあるは、なほあはれなりけり。

ともあれば、天下の主に似合ひたりとや申さん。

○大名の世にすぐれて物見なる鬚をもちたまへるあり。あまりに鬚をまんじ、來るほどの者に、我がひげをばなにといふぞと問ひたまふ。たゞ世上に殿樣のお鬚を見るものごとに、から物と申さぬ者は御座ないと申しあへり。大名うちゑまませたまひ、げに誰もさいふよ

と、鬚をなで〳〵して、そこなる者こえよとまねかせたまひ、身ちかくよせさゝやきて、みづからひざをとらへ、弓矢八幡、日本物ぢや。

○河内の國に交野といふ所あり。かた野の御狩と書けるこれなり。彼の領主に大塚彦兵衛とかやいうて、あたりまで崇敬の人ありき。宗祇と入魂他にことなり。卯月のはじめつかた、祇公たちより給ひ休息のほどありし。いろ〳〵風流の物語に時うつりて、なにと祇公はいまだ郭公の初音をば聞き給はぬや。いな夢にだもおとづれずとあり。大塚さらばわれ發句を仕り、啼かせんとて、

啼けやなけ、わが領内の郭公。

とあれば祇公の脇に
孫子をつれてなけ、時鳥。
第三をする人なし、迚の事にさた候へとあれば、また祇公、
とにかくに御意にしたがへ、郭公。
時にあたり人の心をやぶらんは興さめて見えぬべし、祇公のあいさつ
いたれるかな。
○容ことに瘠せ黒みてわたらせたまふお大名ありしが、近習の侍に
むかはせたまひ、予が顔が猿に似たと人みないふと聞いたが、まこ
とか、うそか。侍うけたまはりて、これは勿躰なき御諚に候。たれ
やの人さやうの事をば申上げるぞ。世上にはたゞ猿の顔が殿様に似

たとこそ申し候へ。大名聞き給ひてゆゝしくも申したり、さこそは
侍らんずとて、いさゝかも憤りなかりしと、大名は大耳なれや。

うつけ

○腑のぬけたる仁に海老を振舞ひけるが、赤さを見て、これは生れ
つきか、また朱にてぬりたる物かと問ふ。生得は色が青けれど、釜
にていりて赤うなるといふを、合點しねけり。ある侍の馬に乗りた
る先へ、二間まなか柄の朱鑓二十本ばかりもちたる仲間どもゝの走
るを見、手を打つて、さても世は廣し、きどくなる事やと感ずる。
なにをそなたは感ずるやと問ひたれば、其の事よ、いまの鑓の柄の

色は、火をたいて蒸いたものじやが、あれほど長い鍋がようあつた事やと。

○ある人風呂に入つてゐけるが、俄に顔色かはり、あら苦しや、船心があるといふて吐逆する。こは何事ぞ、海はなし、船はなし、異な病やと不審しければ、されば、只今是れへ入られたる大ひげの男、此のほど乗りし船の船頭によく似たとおもうてあれば、そのまま醉たと。

○藤五郎とてこざかしき者と、専十郎とてうつけと、ともに田舎の者、在京するに同宿なり。二人つれだち講堂の風呂に入らんとす。藤五郎此のほど専十郎がうつけをかしく見つけ、さいはひの事や

小風呂にて頭をはらんと工みかまへて、専十郎、京の習に風呂に入る者は、かならず頭をはるぞ、腹をたつると田舎人といふ、はられてもこらふるが都人ぞといひ教へ、小風呂にともなひ入り、思ふさま目と鼻のあひだをはりけり。専十郎いふ、藤五郎はやくはせたはと。沙汰するな〳〵とてまた一つはりてけり。藤五郎またくはせたはと、専十郎おもふ、われば かりはられて歸らんは本意なしとあんじ、老人のよぼ〳〵と入る者をまちて、おづ〳〵一つはりたれば、彼の相手大いに腹を立て、いづくのうつけめぞ、是非はりかへさんとわめく時、専十郎いふやう、藤五郎いかい異なる者があるは、初心ものじやと。

○下手なる長談義の席に、よはひ五十にあまる女房かたびらをかづき、聽衆みな〳〵立ち去れども、ついに一人立たず居たり。長老高座より感じてほめんと思へる時、彼の女房、唯今目さめたる顔にて見あげ、昨日の長老のまだ御座あるはと。

○ある人錢を埋む時、かまへて人の目には蛇に見えて、我が見る時ばかり錢になれよといふを、内の者聞き居て、錢を掘りてとりかへ、蛇を入れておきたり。件の亭主後に掘りて見れば蛇あり。やれをかしや、やれ見忘れたかと、幾度も名乘りつるこそ聞く事なれ。

○うつけらしき友達どものよりあひ、おのれ〳〵が妻の噂を詰る。中に一人いひけるは、我が女房は手きいて、所帶ようて、姿いつく

しく、愛敬あり、いはん方なく覺ゆれども、とかく心が短慮にて、月々に一度二度われをたゝくにくたびれた。また一人の男も、それ、われが子持もそしる事努々ないが、ともすれば頭を杖にてきするにあきはてた。今一人がいひけるは、とかく女房に叩かるゝは、日本一のうつけ者じや。さて〳〵そちどもは耄れ者やとわらふ時、先の二人、何卒女に叩かれぬ身のもちやうがあるかや。中々秘事がある、知りたる者があるまいというて、揚句に穿物はかずに、逃げたがよいと。

○振舞の汁に大きに見事なる筍出てたり。人みな大竹にならんものを、むざと食ひすてんは惜しいなと沙汰しければ、さるうつけ、

いや竹は大事もない。大木になり、挽物につかふべき松茸をさへ食ふほどに。

○蒲牟飛彈殿所勞すでに一大事なるとて、人々あつまり氣をもみゐたりし中に、うつとり二人頭をあはせさゝやきけるは、せめて飛彈殿の壽、三年つゝがなかれかしと歎きけるが、一人いふ、よき毒をとゝのへてあげたい事ぢや。それは何としたる分別ぞや。さればよ高い毒をのめば當座に死なず、三年して死ぬといふほどに。

○龜はいかほど生くる物ぞ。萬年いくるといふ。分別ありがほの人龜の子をとらへて、今から飼うて見ん物をと言ふ。かたはらの者あざわらつて、命は槿花の露のごとし、たとひ長壽をたもつも百歳を

出でず。萬年の命をなんとして試みんやといへば、げにもわるう思案したよと。

○道行ぶりに向ふより來る者を見れば、百八の珠數をくびにかけ、高野笠の樣なるを被てあゆむ者あり。うつけものこれを見つけ、手をうつてかんずる。そなたが着たる笠は事の外大きや、何としてそのじゆずをば頸にかけられたと問ふ。いやこれは先づ珠數を頸にかけて後に笠を着て候ふといふたれば、とかく物をばきかいではと。

○盗人にあひて、これはどちの方よりいか體の者のしわざぞ。いかさま内より引手ありやと種々算段ある所へ、こざかしき者ふと來りて、此の盗人に入りたる者こそ、わがよう知つた〳〵といひけるま

ま、なに者ぞ聞かせてたべと、あながちにわびければ、そと囁きて云ふやう、此の盗人はものが欲しさにはいつたと。

○さるかしこき人、數寄に行き路地へ入りたれば、植ゑたる竹の先をつゝみたるが何本もあり。つく〳〵見て、あら奇特や〳〵と感ずる。相客ふしんに思ひ、何事やらんと問うたれば、其の事よ、あれほど長い竹のさきへかゝる階子のあつたが不思議じや。

○思ふとぢ四五人いざないて清水へ詣でしが、茶屋に腰かけながらひたもの餅を喰ふ。をりからひとり俄にいひ出だしけるは、やれやれ頬がすくみ、口のあかれぬ病が出たはとて首をさげ、難義なるさまなりしかば、人みな肝を消し、こはいかなる事ぞと覗ひ見けるに、

編笠を被ながら餅を喰はんとせし故なり。編笠の緒を解き、頬をさすりていかゞあるやと問ふに、彼の男しばらく思案して、秘事はまつげじやと。

○十人ばかり連れだちて北野へ夜ぶかに參詣しけり。廿五日の群集なれば、おしおされ下向する道すがら、夜もほのかにあけぬ。友達の中に一人腰のまはりを見れば、脇指の鞘ばかりに刀を添へてさしたり。こは何としたぞといふに肝をつぶし、鞘をぬき吹いて見つ、叩いて見つすれども無し。揚句にいふ事は、おれなればこそ鞘をとられぬ。

○ちとたくらだのありしが、人にむかひて、われは日本一の事をた

くみだいたはといふ。何事をかと問ふ。さればよ臼にて米を搗くを見るに、勿論したへさがる杵はやくにたつが、上へあがる杵がいたづらなり。所詮上にも臼をかいさまにつり、米をいれて搗かば、兩ともに米しろみ、杵のあげさげそつになるまいと思案したりといひはてぬに、さてつりあげたる臼に米の入れやうはと問へば、まことに其の思案はせなんだよ。

○ある者饂飩の出たる席に、かたのごとくたまはり、揚句にいふ、方々にて實ばかりを下さるれども、終に此の花を見た事は御座ない、こなたにならてはあるまい、とてもの思ひ出に見參らせたいといふ。何事をいふぞやと問へば、誰も知りて申すうどんげのはなと。

○京にて盗人にあうたと興さめがほし、隣家の者あつまり居たる處へ、沼の藤六立寄り何が失せたと問ふ。鍋が見えぬといふに、其のとりては我が知りたるといふ、扨々聞きたやと立ち出てけり。手招きして亭主を傍によびのけ、これは定度公家がたの御内の者がとつたぞ。なにとて。昔からなべとり公家とてあるほどにと。

○岩千代とて十四五にてうつけたる子あり。門より走せ來り、かゝよ〳〵錢をひろうたといふ。母かようひろうた、其の錢はどこにあるぞ、いや拾ふことはひろうたが、また落いたは。

吝太郎

○すぐれてしはき者のたま〳〵得たる客あり。何をかなとおもひても任郷の風情なれば、心はかりやなどゝいふ處へ、豆腐は〳〵と賣りに來たれり。亭主豆腐を買はん、さりながら小豆の豆腐か。いやいつもの大豆ので候と。それならば買ふまい、めづらしうあるまいほどにと。

○參河の國に宗惠といふて有德なる者あり。牛涯のあひだいかなる煩あれどもつひに藥を一度のまず。年至極し、既にいまはの時、知音の人竹山の午黄圓をあはせあたへんといふに、すこしも口をあ

かず、齒をくひしばりゐたる。時にこざかしく、此の午黄圓鉞の出る藥にてなし、たゞ〳〵というて聞かせたれば、口をかばとあさの呑みけりとなん。彼の國のされことばにも、宗惠が午黄圓てたゞじやといひけるはこれ故ぞや。

○ある寺の住持弟子にいひつけぬるやう、客あらんたび忘れざれ、まづ盃を出しては愚僧が手の置處を見よ。額にあらば上の酒、胸をさすらば中の酒、膝をたゝかば下の酒、此の掟をむく事なかれと示す。一度や二度こそあらめ、人みな後は見しりたりしに、さかしき且那參詣する。例のごとく酒を一つ申せやとて膝をたゝきしかば、だんな手をつきて、とても御酒をたまはらば額をなでゝくだされい

でと。

○我が門に立出てあそびゐければ、ふと知音の者の通るに見參したり。やれめづらしや立よりたまへととむる。嬉しくも逢ひたり、ちといそぐ用のありて行く、此度は許したまへといへども、さりとはたまの事なり、ふるまはすによられよやと、頻りにとゞめしかば、去りがたくて立ちよりし。かくて待てども〳〵茶をも出さず、日も暮れかゝり、目もくらうなる程なれば、客腹立し、人をうつけ者に仕なしたるはといふに、さればこそ、われは初よりふるまはすに寄れといふたはとて、まはとずとの間に句を切りたるぞをかしき。

○客來るに亭主出て、飯はあれども麥飯じやほどにいやてあらうずと

といふ。我れは牛得むぎ飯が好きじや、麥飯ならば、三里も行きてくはうといふ。さらばとてふるまひけり。またある時件の人來る、そちは麥飯ずきぢやほどに、米の飯はあれども出さぬといふ。いや米の飯ならば五里行かうとて、また食うた。

○美濃の國にてある侍の内に、丹波助太郎とて大欲心のいたづら者あり。誰にても目下なる人といへば、ねだりて物を取る者あり。ある時在郷にて百姓、助太郎がありくを見つけ肝を消し、いかにも隱れんとしけるを、そこなるはどこの者ぞと問ふ。たゞ地下の百姓と答ふ。そのまゝ助太郎、われに禮を百しやうといふや、思ひもよらず、せめて二百せよとぞまとはれける。

○伊勢の桑名に喜藏庵とて、いかにもしわい坊主のありし。たまさかに賓客のきたれり、對面の後眠藏に入つて再び出でず、客不思議におもひ、そこらあたりたづぬるつひてに眠藏を見られたれば、脇指をぬき百つなぎたる錢細の口にあてゝゐけり。こは何事ぞと問はれしかば、されば候ふよ、此の百錢の口をきらうか、さらずば腹をきらうか、其の思案を仕ると申しあへり。

○ある藝者の親子つれだちて貴人の前に侍りしが、子にて候ふ十四五歳なる者、大名の御座あるまはりにありし脇ざしを取つて見、ひたもの賞めければ、親がいひけるやう、さやうにお腰の物などをむさと賞めぬものぞよ、大名はひよくと下さるゝことがあるものじやと。

○雨ふる日のさびしさに、よしある方に尋ね行き、上戸の二人よりあひ、しゆ〳〵話しても、時すぐれど、さらに盃の噂もなければ、客やうすを見きりいふ、貴所の酒でも我が酒でもなうて、大酒がして遊びたいのと。

○濃州の岐阜に不動院とて眞言宗の老僧あり。正月の菓子に國の名物なる枝柿三つすゑて出し、其の分にて毎年時宜調へぬるを、おどけ者よく見知りて、あまりにしわきはたらきをよく見、例の菓子出てける時、あら珍しや賞翫申さんと、一つならず二つまでくひけり。院主は苦々しき事に思はれ、あの態ならばみな食はれん、さら

ば愚僧も相伴仕らうと、とりて食はれける心の内ぞをかしき。

賢だて

○和泉國に鹽穴といふ侍あり。馬上より鍔の落ちたるありと見付け、馬をとめ、仲間にあれなる物をとりて來れと。仲間とりあげ、これは柿の帶で御座あると。われも柿の帶とは見たよ、されども馬が恐るゝほどに、そちにとらせた。

○出家のさまかへて武士になりたるが、馬にのり遊行する道に、ないやらん珍しく赤漆にて塗りたる物ありと見附け、小姓を招きとりよせけるに、小姓わたしざまに、これは伊勢海老にて候ふと申した

るに、そち體さへ知りたるいせえびを、我れが知らいてをらうか。これは朱のさしやうのめづらしさに見るよと。

○ある僧、小者を一人つれて錢湯に行き、帶ときふためきて、頭巾かつぎながら小風呂に入りぬ。常に何事も利口をいふが憎さに、小者も見ぬふりし、二風呂めに頭巾をとりたまはてといひければ、騒がぬていに、あたまをさぐりて、もはや取らうかなと。

○人の親の大事にわづらふ時、針立のよ手とてよび來る。針立すなはち天突の穴に針さす。息女あまたまはりにゐて見る内に氣色かはる。父親の顔の色かゝはりたるはと、泣くを見て、針立目を見出し何事にむざと泣くまいといましめ、針をぬくと同時に、さあ泣けと

いふ、わつと泣くまぎれに出てて逃げたり。

○目醫者あり、其の身の目はくさりてゐながら、目藥は天下一なりと自慢し、一度させばかすみはとるゝ、二度させば眥も切るなど廣言せしを、扨てそなたの目は何とてなほらぬ。さればわが藥妙なればこそ頻先にてとゞめたれ、さなくが頤までもくさりなんと。

○老父あり、唯さへかすむ目もとの暮がたに、二階よりおりんとする。下に息子の居けるを客人かと思ひ、ひたもの慇懃に請じけり。後に私て候ふと申せば、そちとは始よりわれも知りたれど、我れがやうなる苦界知らずには、ちと什付を教へんとて、それにいふたよと。

○花見の興のかへるさもたそがれ時になりぬ。道のほとりに人の立ちたるすがたありければ、あたまを下げ手を合せて禮をする。つれの者、あれは石塔なりといへば、彼の人いふ、當世はあれていの人にも禮をしたがよいと。

文字知り顔

○或人小姓をかすなぎ〳〵と呼びて使はるゝ。客不審に思ひ、其の故を尋ねければ、さる事あり、春長と書けり、かすは春日のかす、なぎは長刀のなぎよと。

○革細工のかたへ侍のもとよりとて、太刀に文をそへ持來る。開き

見れば、此の日々念を入れ給り候へとあり。つひによむ者なし。亭主わざと侍のもとへ行き、直に尋ねければ、それこそ誰も知るべき文字よ。かしらの日はついたちのたち、次の日は二日のつか、太刀のつかをまきてくれよにて、すみたるものをとなり。

○備後國に久代とて形の如くの大名あり。土生といふ侍を藝州元就へ歳暮の禮義に遣られし。對面あつて、出雲の國に雪はいかほど降りたるぞとあれば、彼の土生手をつき、雲州の雪は馬足不足にして、恰も鐵をのべたるが如しと申上げたり。大いに氣色を損じ、今より以後此の者使に無益とぞ。唯だ出雲は大雪にて、馬のかよひも御座なくと申さんものを。また彼の土生在郷に住む侍なれば、過半耕作

などしけり。或る五月雨の晴れ間に、鋤を杖につき、しづかにありく。百姓行きあひ、いづれへと問ひければ、田水見行とこたふ、田の水を見に行くといふたはまし。

○武士たる人の殿、とのといふが、殿の字の聲はでんと敎ふる。また月といふ字の聲はぐわちとをしふる。此の二字をならひ得て、いかさまはれがましき處にて言ひ出さんとたくまれけるが、或時館に座敷能のはじまりしを、物見のため人おほくあつまりゐけり。其の砌、彼の武士威儀をけだかくかい繕ひ、殿原よ〳〵、それにゐる者どもを、みなえんから下へ月こかせよ。

不文字

○小豆餅のあたゝかなるを夜咄のもてなしにいだす。其の席にをく山の者ありし。中老ほどの人、餅を見る〳〵、とかく夜食は多く食ふが毒にてあるよしいふを聞き、さては餅のことぞとおもひ、彼の山賤在所にて、晝の雜掌に大豆の粉をそへ餅をいだす時、かまへてみなお聞きあれ、さる人のいはれしが、此の夜食は多く食ふが毒にて候ふと。

○ちと假名をよむ人のいひけるは、此のほどつれ〳〵をさい〳〵見てあそぶが、おもしろう候ふよとありしかば、其の座にゐたる者

のさし出でかまへて、かまへて口あたり好しと思うて多く御まゐるな。つれ〳〵草のあへ物も、すぐれば毒じやと聞いたに。

○京都四條の河原にて將棋の駒をひろひたる者あり、何も知らで主に見せたれば、是れはすごろくの碁いしといふ物なりと。

○南無の二字ばかりをいかゞしてかは見知りたるが、其の餘の文字は闇なる男、天神の名號のかゝれるを見、なむあみだ佛と讀みかゞへければ文字あまれり。あげくにいふ、此の念佛はちと長いに、融通念佛か知らぬと。

○とかく當世は文章のみじかさがはやるといふを聞きて、侍なる人のかたより、知音の僧へつかはしたるとなん、

送遣る十八本松茸恐惶謹言。

○また商人遠島より古郷へたよりあるといふ時、妻のもとへ、文ならびに音信をしけるが、態と

一筆、針三本、千松なかすな、火の用心、かしく。

とも書いたり。

自墮落

○出家あり、一人の弟子にいふ、明日は吉野の花見に行かん、先途程遠し、曉よりおきて出立を用意せよ。心得たりと夙におき、酒飯とゝのへ戸を叩きければ、坊主いまだ夜ふかなりとて起きず。さる

程につねゝ弟子に隠し、寐ねざまには燒味噌と號して鷄の玉子をとゝのへ、肴に用ひて酒をのむ事を、弟子は心外に思ひねけるが、その時こらへかね、夜がふかいか淺いかは知らぬ、燒味噌のてゝはもはや三番ないた。

○つねに人みな干鮭は身を溫めてよき藥などいふを聞きて、われも養生に食ひたき事やと思ひ、老比丘うつけたる仲間にむかひ、藥にちといる事あり、干鮭といふ物を買うて來たれとて代を三白わたしけり。すなはち買ひもとめて來りぬ。折節あしく客のある座敷へ、くだんのうつけ、によつとさし出しけるに、老比丘赤面し、其の干鮭をすぐに泉水へはなせと申されたり。

○ひそかにつかはす使の小者、久しく病にふしけり。せんかたなくて坊主みづから魚屋に行く。いかにも夜ふけしづまりたるに、門を叩くおとせり。内よりたれ人ぞと高聲にとがめければ、出家屋から魚かひにきた、戸をあけよと。

○鱈、反古に包みやき、飯にそへて食せんとする時、檀那外れり。坊主れうけんなく膳をもちて立ち、酒を出してふるまひぬ。其の後種々思案し、ある時反古に大こんをつゝみ焼きふるまひて、以前の件の檀那を請待する。即ち領掌し、時分に紛らかさんとたくみ、に來りしが、かの焼く體を見、座敷へ卒爾に入らずたゝずむ。姥のあるが出でゝいふ、いやあれは鱈ではありない、大根じやに御座あ

れと。

このまへのがいよ〳〵鱈にすうだ。

○あまりに齋をくひ過ごして、腹便々と歸るさにもちたる珠數をおとしながら、うつむかんやうなさまゝに、足の指にて挾みつ、じゆず御免あれと申せしと、ちとじたらくの類かや。

○僧俗ともにまじはり語りなぐさむ座敷にて、ある坊主急に咳をしけるが、喉より痰のかたまりたる樣なる物を吐きいだしたり。そばにゐたる男ゝ取りて見れば蛸なり。是は異なものが出たと、口をそろへていひければ、されば喝食ゝ時くうてあつたが今出た。つねに蛸は消えかぬるといふが眞じやよ。

○都の寺に檀那朝とく參り、本尊も拜し、茶堂の傍にて珠數を繰り、佛名を念じぬけるが、爐にかけたる釜の湯おびたゞしく煮あがりて蓋をたゝく。釜と蓋とのあひだに何やらん見ゆる物あり。蓋を取りたれば蛸なり。これは何ぞ、蛸ではなきやといふ時、坊主の返事、さる事も有るべし、ゆふべ蛸藥師の水をくみよせて、茶の湯をしかけさせたほどにと。

○學跡をも覗さける程の沙門、鰻を板折敷の裏に置き、菜刀にて切る處へ、思ひもよらぬ檀那參りたり。少しも色をたがへず、世界みな不思議を以つて建立す。されば山の芋が鰻になると人のいうてあれど、さだめて虛說ならんと疑ひしが、これ御覽ぜよ、山のいもを

汁にしてくはんとおもひ、とりよせ置きたれば、見るがうちにかやうになりて候ふは。何事ものの疑ひめさるゝな、これ御覽せよとぞ申されける。

○ある一人坊主、鳥賊をくろあへにしてたまはる處へ、ふと人來れり。口をぬぐはん料簡もなかりつるに、そなたの口は何とて黑いぞや、かねをつけられたかと問ふ。いやあまり寒さに、只今燃えさしを一口くうたと。

○一日の精進を千日ともおもひ、こらへかぬる人はまゝあり。さる間ひとりの老人、他事なき知音のもとに終日物語し、暮におよんで座を立つ時、明日は我が親の日なり、無菜の齋を參らせんやと亭

主のいひければ、手をあはせ、まつぴら御免あれ、私の親の日さへ難義するに、そなたの親の精進までは、のう嫌やとぞ申しける。

○坊主いつも鮎の名をかみそりとつけて箱に入れもとむるを、常の事なれば小者よく知りたり。ある時彼僧河をわたるに、鮎の多くありくを見て、小者後より、御坊様、いつも秘蔵してこなたの人物にするかみそりがありくに、足を切り給ふなといひければ、坊主、今は八月なり、かみそりがいかほどあると錆びやうほどに、足はきれまいぞといへり。

○昔より八瀬の寺は禁酒なり。寺中に酒を好む僧のたくみて、経箱をさらせ、角をとり、いかにも結構に塗らせ、上に五部の大乗経

と書き付け、それをかよひにしけり。酒をとりて來るに、人それはと問へば、是は五部の大乗経なり、京にいたゞかん事を願ふ檀那あり、其の故に折々もちてゆきかよふとこたふ。あまり京かよひのしげゝれば、人あまねく推してけり。ある時内の者経箱をもちかへる途中にて酒のにほひをきゝ、飲みたさやるせなし。そと口をあけ給はりぬ。そろ〳〵寺にかへるに、それはなんぞ、常のごとく経にて候ふといふ。さらばちといたゞかんとて手にとり振りて見、まことにお経やらん、内に五ぶ〳〵といふ聲がする。

○ある出家、ふかくかくして鯰を食ひける處へ、ふと檀那來れり。爲方なさに皿ともにあたまへうつぶけ、手にておさへたれば、頻か

らおとがひへ汁のながるゝを見つけ、こなたには腫物ができまゐらせたかと問ふ。おうといへばよかりしを、あまりに肝をつぶし、いや俄にぬた鯰ができて候ふといひけり。

聞いた批判

○貴賤袖をつらね、われも人も珠數つまぐる體を見、被官たる者、やさしやひうがんとて佛まゐりをつかまつるよといふを、主聞きつけ、ひうがんはかたことや、ひがんといへと。これはかゝる事、われらもはや五十にあまれども、ついにひうがんとこそ申しならはし候へ、彼岸といふは聞かず。主大いに腹を立て、あひてに足らぬ事

も、あまり汝あらそふがにくき程に、地頭に儀を得よやとて、彼のひはんを聞きたれば、双方に理あり、彼岸は春と秋とに分てり。秋は收納のいとなみ、月に夜田刈るいそがはしさに、如何にも言葉みじかきを要とし、ひがんといふよし。春は四方山の山並打霞み、百囀の鳥のいろ、花ならねどもかうばしく隙あり。げにも胡蝶まひあそぶといふ折なれば、ひうがんこそよろしからめ、あなかしこ、あらそふ事なかれ。

○市のたつ町のかしらに小宮をたてゝ、恵比須の作りたるあり。たちよるもの、あらいつくしの恵比須とほむるを聞いて、あれをえびすとはいはぬ物ぞや、きびすといふがほんなりとからかふ。町奉行

へあげてすませと双方出でたりければ、どちも大事なし、木にてつくりたるは、なんどきもきびす、紙にかきたるはいつとてもえびすといふべし。

○從一位の右大臣征夷將軍源家康公天下を治め給ひ、此の御代に賢臣義十多き中に、板倉伊賀守京都の所司代として訟を聞きて、理非を決斷せらるゝに、富貴の人とてもへつらふ色もなく、貧賤の者とてもくだせる體なし。然る間上下萬民裁許を悅んで、奇なるかな、妙なるかなと、讃嘆する人ちまたにみてり。一滴舌上に通じて大海の鹽味を知るとあれば、其の金語のはしをいふに餘はしりぬべきや。しかる時、越後にて山伏宿をかりぬ。其の節國主の迎に亭

主罷出づるに、彼の山伏のさしたる刀、こしらへといひ、つくりといひ、世にすぐれたる物なるを借りて行き、いまだ宿に歸らざるあひだに、一國德政の札たちけり。其の程に亭主かへりても、刀をかへす事なし。山伏こらへかね頻りにこふ。宿主返事するやう、そちの刀かりたるところ實正なり。されども德政の札立ちたる上は、此の刀もながれたるなり、さら〳〵かへすまじきといふ。出人になりければ雙ノ江戸へ參り、大相國御前の沙汰になれり。其の砌板倉伊賀守下向あり、御まへにはんべられし。此の裁許いかにと御諚あるに、謹んて造作もなき儀と存じ候。幸ひ札の上にて亭主が借りたる刀を流し候はゞ、また山伏が借りたる家をもみな山伏がに仕るべ

き物なりと申し上げられしかば、大相國御感甚だしかりし。當意即妙の下知なり、以二正理之藥一治二訴訟之病一、挑二憲法之灯一、照二愁嘆之闇一といふ、金言もよそならず。

○大佛の前にて、わかき侍の小者二人つれたるが、茶屋によりひたもの餅をくひ、時宜なしにたゝんとする。亭主、錢はといふに、一錢のあてなし。いづくの人ぞ。我れは關東の者なり、賴みたる人の使に京へのぼる。やがて返辨に及びなん、此度はかけられよと。亭主返答もせずあざ笑つて、かくるとは二文や五文の事候ふよ、十疋は過分なり。錢なくば脇指を質にとらんと。侍、主の使に行く者のまる腰はいな物なるべし、ゆるされよと詫びてもきかず。侍ほど

の人料足なくば食ふまじきにてそあらんめ、とかくわやくなり、いざ板倉殿へ行けと、町の年寄をつれだち所司代へ出づる。茶屋右の趣を申せば、此の事いかにと尋ね問はるゝに、侍も陳ずべきやうなし。伊賀守殿雙方を聞きて、詮ずるところ是れは十疋の料足さへとれば、茶屋もいひ分あるまじきかと問はる。なか〳〵別の仔細候はじと申す時、さらば鳥目とらせよと、十疋をつかはしてぞかへされける。侍には、御邊關東の人といふ。京伏見は、故郷にて知音などある所にかはり、片通りなれば、後に返辨せんなどいひ、物の代をすまさず過ぐる事はなるまじきぞ、以來其の心得あれと、意見してぞもどされける。

○山科の百姓薪をこり、負ひたるまゝ山より直ぐに京に出てて賣る。さるほどに彼の薪の上にさして置きたる鎌をうちわすれ、宿に歸り漸く思出し、右の薪かうたる人のもとに行き、件のよしをいひてければ、主人出合ひ、われは薪をこそ買うたれ、鎌をば買はず、何事をぼれていふやらんと、一向とりあはねば、是非なう所司代へ申しけり。雙方よびいだし聞きての上に、伊賀守、先づしばらくほどあらんに、肩衣袴をぬぎゆるゝとねよと氣をくつろげ、ぬぎたるをとりよせ、そと持たせつかはし、此の肩衣袴と、そちにある鎌をかへておこせよとあれば、女房うたがひなく思ひわたせり。其のごとくなる鎌を五六挺まして出し、百姓に見分けよとあれば、是れ

ぞ私のなれとてとりたり。其の後鎌をかくしつるものに、過錢として三貫文いださせ、以前の百姓に扶持ありし事よ。

○慶長七年七月七日に、脊中に負籠などいふものをかけつる人足、脊せくろみ、竹杖にすがり、京の町をとぼれば、見る人、あなおそろしげになん、此の頃は地獄の釜の蓋もあき、罪人聖靈となり來るなると聞くが、さやうの者にやといひあへるに、此の者みせにより瓜を一ついかほどといへば、二文とこたふ。腰にたゞ一文あり、盆の結縁とおぼして給はらんやと、其の分にもせんとあり。即ち瓜をとり、かしらよりかぶり食ひて後、はさみたる錢を見れば、おちて繩ばかりぞ候ひける。瓜の主人慈悲とおぼしめしゆるし給へかし

と歎くに、此の人天然と慳貪にて、沙汰の限り、すりのたぐひとおぼゆるなり、出でさせ給へと町の人を催し、やせたる男を追立て、板倉姫垣の内に引きすゑ、右の樣子具に訟へ申す。人足もありのまま言上す。伊賀守聞き給ひ、何れも事の實否を糺明すべし。先づこの者を瓜賣に預くるに、二時の飯をそちあたへ、晝は町としてよきに番すべし、ゆるかせならば我れをうらむなとて歸されけり。たゞ一文の事にいらぬ儀をいうて造作する者とは思ひながら、一間なる所におしこめ、番をすゑ、毎一の食をぞ與へける。六日七日に及べども糺明なければこらへかね、おの〳〵參りて御糺明あれかしと申すに、伊賀守、事の多きに忘れはて候、今思案するに、時は盂蘭盆、

科は瓜一つ、是れほどの裁許は初めにすべかりしかど、瓜賣の慳貪なる心根がにくさに延べつるぞ。飢に望みたる者を見ては、招きてもあたふべきに、せんかたなき者をとらへ來て、錢一文の事に首をはねよとは、なんぞ慈悲をせさすべき。ために此中はやしなはせたり、いそぎ其の者ゆるしかへせと下知あれば、其の席にありし人、みな頭をかたむけ、感涙をながさぬはなかりし。

○下京に、ちと有德なる者男子を一人持ちたり。彼れ二歳の春母にはなれぬ。繼母に添はんをいたはりながら、さすが男やもめにて送らんよしもなければ、かさねて妻をもとめ置きしが、惣領すでに六歳の春、父病の床に臥しぬ。かなふまじき事と得心し、兄に向ひ、

我が子幼稚なり、そちへとり養育成人ののち、家をわたしてくれられよといひおき、終にむなしくなれり。遺言のごとく子をぢの方へ呼びとらんとするに、繼母いふ、我が腹を出でぬばかりに、いかほど辛苦して年月そだてたるぞや。其の上此の後また夫にそはんにもあらず、髪を剃り、あの子を育て、家をもりたてんもの、なか〳〵そちへはやるまいと怒り、双方伊賀守の前に出てたり。いふ處いづれも理あり、それなる子爰へ越せよとよび、膝のもとになつけ、こたつにあたらせ、菓子などとりくはせ、心やすく思ふ顔の折、そちは伯父のもとにゐたいか、また母のところにゐたいかと問はせ給へば、をぢのところにゐたいといふ。さらばもとの處へゆけとありし。

伯父と後家と子の手をとりうばひあふ、子は泣く〳〵伯父のひざに居けり。伊賀守下知せられけるは、まづしばらく伯父のかたにあづけよ、とかく子は伯父になづいたほどに、後はともかくもあらんと、やはらかにいうて戻されし。

○京にて猫を失へる者あり、厨子小路にいたり、身をやつし尋ねしが、ある所にて不思議に見付け、これは我が猫といふ。亭主出てて、そちがといふ證據は。をしくほしくの爭なれば、是非終にわかたず。板倉伊賀守是非のあひて二人對座せさせ、件の猫を座敷の中におき、もとの主も、今の主も、手に鰹を一ふしづゝ持ちて呼べ、生れてより育て馴れたる方へこそ行くべけれと。あんのごとく始めう

しなひし者の膝の上へ、なく〳〵行きし事よ。

○京矢田の町に夫婦の人ありしが、夫さきに立ち、妻歎にあけくれ一週忌も過ぎぬ。後家、惣領の子と其の妹を呼び、なき人の事かたり出だし、涙をおさへつゝ惣領にむかひて、御身ははや家をも請け取り、譲をも取りたれば、今この家と少も殘れるものを、妹の子に聟をとりて渡せとの遺言なるよしいひければ、其の子、我れはさせる譲をもとらず、此の家の財寶もえこそやるまじきと、座敷をけたてゝ立ちさりし後、結句家をうけとらんといふ使を立つるゆゑに、老母腹を立て、燒いては棄つると、やるまじきものをとあれば、町衆あつかひに入り、さきに母のいひわたされたるすぢめに教訓すとも

とゝのはず。惣領目安を認め所司代へ出でにけり。伊賀守其の趣を懇に尋ね問ひて、判決に及ぶまでもなく大いにいかりて、孝は百行の始めなれば、不孝百悪のもとゐなるべし。たとひ母のいふ所僻事なりとも、孝の道を存ぜば、獨りある老母に隨はぬことあらんや。諺にも、親ものに狂はゞ、子は囃すべしといひならはせり。其の上是れは母の理至極なり、其の父が遺言を背くといひ、老母の命にしたがはざる不孝不順の過と云ひ、旁々以つて曲事なり。汝ごとき者を其の儘洛中はおかば、また世の人にも悪行あらん、はや〳〵京を出てよ、延引せばはからふべき事ありとの下知にて、言葉もなくうせ行きぬ。

○綾の小路にて板かへしする日、家主の女房屋根にあがりしが、いかゞしてか、踏みはづして落ちたり。となりの女房其の下にねあはせ、あたまの上へ轉びかゝれば、首の骨ちがひて死にけり。其の女の夫理不盡に、態と殺さんとて落ちたるものなり、是非こらへまじきといひ、所司代へ出づる。伊賀守殿、餘儀なき存分なるまゝ、幸ひ手本あり、右家主の妻を我が女の居たりし處に置きて、そちの屋根にあがり、最前のごとく落ちかゝりて、憎しと思ふ相手の女を殺せとあれば、言葉もなく歸りつる事よ。

○板倉伊賀守殿、齢七旬にあまれば、功名かなひ遂げて身を退き、嫡子周防守殿次いて天下の所司代たりしに、上京にある家主あひは

てけるに、廿歳あまりの子あり。母は繼母、其の惣領には家を渡すまじ、我れに跡を知れと夫の遺言なりといふ。惣領は眼前の親子たる我れをのけ、別に誰か家をしるべきやと怒り、所司代へ双方出てけり。互の意趣をいふ口上に、妻の申すやう、後家と書きては何とよみ參らすると。周防守、のちの家と讀むとあれば、其の儀ならば我等の知らてかなはぬ事にこそと申す時、まづ立つて歸れ、かさねてせんさく濟まさむとなり。宿に戻り、公事かちたり、さらば尼にならんと親類いひ合せぬ。再び裁許とて、また決斷の座に出てたるに、そちは髪を剃りたるかとたづねらる。なか〳〵二度夫を持ち、うき世の望あらずこそと思ひさだめ、出家のすがたにまかりなりて

候ふと。其の言下に周防守殿、さらば出家とは家を出づると書きたるまゝ、此の座より直ぐに家を出でよと。

○平安城にて質に具足をおき、うけんとする時に見れば、鼠が糸をくひたり。うけぬし難儀におもひ、いろ〳〵理をいうてなげき、さらば利足をなりとも少しはゆるされよとわびけるに、質屋さらにきかず。剰へ鼠を一つ殺して、これが藏にねて具足をくらうたる科人なり、然る間成敗して候ふともたせつかはす。質おき口惜しき事に存じ。所司代へ罷出で、始終を詳に申しければ、多賀豐後守下知せられけるやう、扨は鼠は盗人なり、盗人の居たる家なる間、闕所せよやとて、家財をことゞくとり、質おきにくだされたり。あり

かたき心の水晶なり。窮鼠還嚙レ猫とあれば、憎むところ、狂惑なる鼠根性なるかな。

○人ありて所司代に出て申上げけるは、我等の家へ常に參る乞食の候、ねざりにてあれば不便に存じ、折節は庭のすみにふせりなどいたし候ひつるが、外より盗人の入りたるとも見えざるに、飯を仕る釜の失せ候。案ずるに彼のねざりの取りたるものならん、いかゞと申せば、多賀豐州聞きて、其のねざりはいづくにねるぞと尋ね、さらばそちは歸れとて戻されたり。後かのねざりを、物とらせんとなり、參れやと呼びよせ、不便のすがたなるに、あれにてゝなる釜を取らせよとて、失せたりしほどの釜をやりければ、彼のねざり喜

び、あたまにかむりて歸る。さては件の釜を盗みたる事うたがひなしとて下知せられける。

○京にて銀子卅貫目持ちたる者、命終る時妻にむかひ、我が先腹の男子六歳なり、十五までは育て、十五にならば銀を五百目わたし、いづくへも商につかはすべし。殘る銀はそちまゝにせよと遺言して書物を渡じぬ。彼の子既に十五になる時、右の後家銀子を五百目子にやりいづくへも出てよといふ。子、さりとも難儀なる旨、所司代板倉周防守へ申上ぐる。母と子とを呼び出だし、委細にいはせ聞き給ひて、其の町の年寄どもに彼の親の行跡はとあれば、一同に申す樣、世に越えたる律義者、また才覺もあり、公義の御用をとゝのへ、

町の重寶にて御座候へと。周防守殿後家に問ひ給ふ、其の銀子は元のごとくありや。なか〳〵あり。扨は汝が夫日本一の思案者なりしぞかし。其の故は、人の親として子に物のをしからんや。女房に取らするといはずば銀をみな遣ひすつべしと、工夫の上にていひ置きたるなり。然る間、後家に取らするといひし卅貫目をば子にやるべし。子に遣すといふ五百目をば後家にわたし、それをもつて寺參の香花にすて、そちは一圓子に打ちかゝり、心の儘に馳走せられ、安安と世を送れ。もし子があひしらひあしく、氣にあはぬ事あらばこちへ知らせよ、曲事に行はんと下知ありつれば、聞く者皆涙を流さぬはなかりき。かくて座を立たんとするに、件の親がいとこたる老

人とて、書物を一通持ちて出て、周防守へ捧げていふ。さだめて一度は子と後家と出入あらん事うたがひなし、これを上げて申せ、後家にいひわたしたるは始めの日なり、そちへ書置は日付後なりと申せし。今仰出さるゝ御下知を謹むで承らんため罷出でたり、親が存じたりし心底と、御批判の趣、すこしも違はずと手を合せ禮して感じたり。

○道ゆきぶりに蛇の竹にさしてあるを見、先なる者、いかいへべうがあるはと。次なる者、いやこれはへべうではない、ぐつねふといふものぞと、互に爭ひしが、此の上の山寺の物しりの出家ありと聞き、それに行きて理をすまさんとかしこにいたる。坊主聞きて、

どちもわるい、これはまむさうといふものにすんだと、二人ながら心にはすまねど、物しりの批判なれば、あまりにちがふまいと合點す。

○一生よみかきの望もなく、たゞ富貴して世を送る人あり、名を福右衛門とつき、惣領を市太郎、弟を市次郎とて、貧者あつまり、手をつかね、膝をかゞめてもてはやしけり。ある時市次郎を始めて見たる、これはどなたにて候ふやと問ふに、あれこそ市太郎殿の舍弟に候ふよとかたる。さればこそ見たる體、兄御より舍弟の器量はましてなどほめけり。其の一座過ぎて市次郎、親に向ひて、われに何とも名がなくば大事もないか、幸ひて、の市次郎とつけておかれた

るに、やゝもすればうつけ者が來ては、市太郎の舍弟〳〵といふたるが、これが氣の毒やと。福右衛門きゝて、さあらうずる、それほどの事をばこらへよ。世中はうつけばかりぞ、われがまへても福右衛門といふ名をばいはずして、ひようふうと市太郎殿御親父とさへいふほどに。

○何者ののぼりくだりに落したるやらん、信濃國の山道に烏帽子あり。ひろひ來たり、かやうの姿なる物世にためしなし。いかさま天人の道具か、山姥などの寶かや、老いたるも若きも、是を見よや拜めやと、かちはだしにて走りあつまる中に一人、是れは禰宜の頭巾といふ物ぞ。一人、いやこれはありきようがりのあたまかくしといへば、すこしもまことにせず。唯だ奥の山の刑部兵衛こそ、若き時殿の夫にとられて京へのぼりし者なれば、かれに見せずばすむまいと、はる〳〵もち行き見せたれば、是れこそ賀茂の祭に能といふ事ありしが、一番に出た三番叟といふ物よ。されども顏から額がうせたほどに、必定三番叟の拔殼といふ物ぞと。

○始めは富みて世を過しける人、俄に落ぶれたれば、せんかたなく髮を剃り、何のあて事はなけれど、田舍にくだり、傘をさしかけられ、位だかなるふりをしてありく。人是を見れば何としたる家尊ぞや。ひとりがいふ、唯だ公家といふ人てあらうまてよ。いや一とせわれも在京して、公家だちのふりをも見たりしが、あれやうなるは

見ぬと。ひとりがいふ、いくげてなくば十げてあらうずと。

○山家にはれがましき客を請ずるとて、白鳥をもとめにつかはす。使、鳥のすがたを問へば、たゞ白き鳥なりと教ふる。心得て市に出でゝたづぬるに無し。ある棚に白き卵のやうなる物あり。是れをしりめにかけ、白鳥かはう〳〵とよばゝるまゝ、かしこき亭にて、白鳥を賣らんとよび入れ、まんぢう廿を一貫にうりけり。取つて歸り庖丁人に見せたれば、疑ひもなき白鳥なりと、切りてなかを見るに大概赤豆の風味あり。今年赤豆がたかい〳〵というたは道理かな、いくらの白鳥か、此のごとく食ふほどにと。

○人のかよひもまれなる山中にて、座頭の琵琶を負ひ、岨のがけぢ

をつたふあり。薪をひろひゐたる賤の男これを見付け、むかふの谷に友達のゐけるを高聲に呼び、やい〳〵あの杖つきむしの出たを見よ。あら珍しや、つひに一期に見ぬ虫やと呼ばはる時、此の十年ばかり先に、あの虫が此の道へ出てあつたが、その年蕎麥がよかつた、今年もさては蕎麥がよからうずよと。

そでない合點

○山中にて衣更着中旬に、農夫二人つれたち出で、一人は山の北原、一人は南原、一町ばかりをへだて畠をうちけるが、南原に鼬一つ走り出でたり。見付けしを幸ひ、やにはに棒をふりあげ打殺さんとし

けるを、北原より、やれ彼岸じやにおけ、ひらに彼岸ぞ、助けよと呼ばはる。さらばとて助けしが、彼の南原の男、さて〳〵つひに彼岸といふ物を見なんだに、けふはじめて見たよ、彼岸が姿はそのまゝの鼬じやと。

○手負には有馬の湯ほど藥はないと、人みないふを聞きたる庖丁人あり。さる所の振舞に雁の汁をするとて雇ひければ、亭主にも問はず、客人のいくたりあるにもかまはず、むざと切りたるに役にもたゝず。亭主大いに腹立しければ、彼の庖丁人、其の儀ならば別の雁を切らしやれよ、此の切りたるば手負なり、ありまの湯にいるればなほる、大事ないと。

○ばくちうちが夜半過に宿にかへり、女房をおこし、一世のあひだに、これほど嬉しい事にあはぬとよろこび、臥しまろび滿足するまゝ、さてはこよひばかりはばくちにかちたる物よとおもひやり、いかばかりの仕合にやはんべるといふ。返事に、こよひも博打に負けた事はまけた。されども此のまへ五百目に買うて持ちたる脇指を二貫目にしかけてやりたるまゝ、一貫五百目のまうけをしたわと。

○日のあるあひだを晝といひ、日のいりて後を夜といふは、いかさま仔細あらんやとおもひ、われは折角思案して、思ひあてたわとかたる。なにと工夫したぞ。たとへば朝になれば、とくから起きて山にゆくものもあり、海にうかぶ者もあり、市にたつあり、奉公に出

仕するあり、日のくるれば、いづれもみな我が宿〳〵にかへりよるほどにさてぞよるといふなるべし。また日ひんがしにかゞやけば、染屋は染めてかけ、塗る者は塗りてほし、きたなき物をも洗ひてほすに、いづれものこらずひるほどに、さてなんひるとはいふものよと。

○盗人物をとりすまして、人なき所にあつまり、それ〴〵に資財を分けどりにしけるが、唯今までありつる身のぐるゐが見えぬ。異な事やといふ、一人つらをふり〳〵、あら不審や、誰もこのうちに盗みさうなる者はないにと。

○なにへんともなき者ども三人つれだち清水へ参り、みちにて先に

行く男、あの清水の観音は、なに観音といふ物ぞ。奇特に人のたつとむ事やと。次なる者が、さだめて釋迦か、薬師かの親類の観音であらうまてよと。後なる男あたまをふり、大いに感じ、とかく物しりとつれだゝねば理がすまぬと。

○中風を煩ふ者あり。醫者のもとに行き脉を見せければ、薬ばかりにては治しがたき症なり。不時三里に灸をすゑられよといふに、いづれもかさねて請合ひ候はんと、急ぎ宿にかへり、さて〳〵うつけたるくすしの申されやうや、富士はきゝおよぶ大山なり、其のふじ三里が間に灸をせよとは、如何に病がなほるとても、そも〳〵艾がつゞくものかと。

○なにとて芍薬をば歌によみたる無きぞと、不審する者あれば、それこそよみたる歌あれ。

難波津に芍薬のはな、冬ごもり
今をはるべと芍薬のはな。

○夜もいまだあけやらぬに、仲間たる者戸をあけ、さてもおびたゞしく雪のふりたるはといふ聲しけり。亭主聞きつけ、如何程ふりたるぞと問へば、されば深さ五寸ほどつもりて候、はゞは知れぬと申したり。

○ゆふべの説經に姥の泣かれつるは、なにの哀れをわきまへてぞと問うてあれば、なにも我れ聞きわけたる事はなかりし。隣のかゝの

あめやさめと泣かるゝほどに、定めて悪しき事ではあるまいとおもうて泣いた。

○借錢を乞ひに幾度人を遣はせどもなす事なし。さらばとて直に行き、これの亭主道善に逢はむと言ふ。亭出でゝ、道善は留守に候ふといふ。いやそちは道善ではなきか、扨てこゝな人は、亭主の道善が直に逢ひて留守といふをうたがはるゝかやと。

唯有

○富士の人穴の勸進というてかど〳〵を歩りく者あり。不思議や人穴の上に堂が建つか、また常燈をもとぼさむとの事やと問ふに、彼

の聖、おのれが口をがばとあきて、此の人穴のくわんじんなりと。

○學もすくなう、療治も秀てたる覺えなき醫者の、田舍より堺の津に來り、日をかさねても、しか〳〵崇敬する者なければ、たしなみしお料足も乏しくなり、すご〳〵と舊の舊里に歸らんと思ふ曉、

かりそめのすまじき物はやぶくすし、
自然乞食となるぞ悲しき。

○宮つかへする侍あり、人まねして清水へ千度詣を二度したり。後朋輩と双六をうち負けていたくせめければ、われ持ちたる物なし、清水へ二千度參りたるあり、それを渡さんといひけり。聞く人笑ひけるを、勝ちたる侍、渡さば得んと、其の日より精進し、二日といひける日清水へつれまゐり、云ふやうに文かき、御前にて師の僧呼び、事のよし申させ、二千度參り、某に双六に打ちいれつと書きてとらせければ、請受り悦びふし拜みて出てけり。まけ侍は思ひかけぬ事にとらへられ、牢屋に居にけり。とりたる侍は德つき司に成りて樂しくぞありける。目に見えぬものも誠をいたし取りければ、佛あはれとおぼしたりけるなんめりとぞ人いひける。

○或者戀ひ暮したる若衆の東國に下るを、かなしみの涙とゝもに大津まで送り、泣く〳〵しる谷越をのぼる。清水の南に若松が池と云ふあり、其の邊にのぞみ思ふ。命あればぞかゝるうき目にもあへ、不レ如身を投げて死なんにはと、帶をとき池に入り、頸ぎはまでつか

りたるが、思案かはり、急いで陸にあがり、

君ゆゑに身を投げんとは思へども、
底なる石に額あぶなし。

娑心

○夢庵は常に牛に乗りて遊行ありし。月しらけて興ある夜、野に出らるゝに、牛、芋畠へひき行き、畠主腹立しわめきければ、こらへよ、歌をよみてそのことわりを聞かせんと、

月も見ず、いもが子どものねいりたを、
おこしに來たは、いかゞあるべき。

○もとは都にすみて子ども五人持ちしが、住詫びて筑紫に下りし。或時妻の方への文に、絹十疋、綿百把まゐらする、たゞし僞なりとかきたり。その返事に、

心ざしあるかたよりのいつはりは、
世のまことよりうれしかりけり。

女房のおもはくためしなくこそ。

○昔語に、女院へ、ある時大きなる杓子をあげゝる事ありし。御覽じ始めなれば、なにとも御知りなくて、左右に御尋ねあれども、同じく存ぜずと申さるゝ。さらば下司に問へとおほせある時、おはしたに右のむねを尋ねらる。聞く者をかしがりて、名を存じたる者

なしと申せば、女院おほせあるやう、われはこれを推した、鬼の耳掻であらうずと。

時頼禪門

思ふべし、人はすりこぎ、身はしやくし

おもひあはぬは、わがゆがむなり。

○細川幽齋公の姉御前に、宮川殿とかやいうて、建仁寺の内、十如院といふにおはせし事ありき。長岡越中殿より、大津にて米を百石參らすよしの文を見たまひ、その返事に、

御普請のやくにもたゝぬこの尼が、

百の石をばいかでひくべき。

とありしを、げに理やと、即ち車にて送り給ひし。

○夫の心俄にかはり、妻に暇をやるといふ。とかく出でていなんとする時、あたりに馴し女房あまたとぶらひ來たり、とてもかなはぬ仕合なれば、身にそへん物をもなどしたゝめられぬぞや。いな、殿ほど惜しき物のなにかあらん、殿をおきて行くからは、なにも身に添へんとは思はぬと語るを、男ひそかに聞き、やるせなき心つき、ながき別れまでに添ひし事よ。

○大名の扶持を受くる座頭あり、茶をひかせられしが、呑んで見給へばあらし、おほきに機嫌そこねしに、

あらくとも、我とかのをとおぼすなよ、

茶臼に目なし、ひきてにもなし。

このことわりにて事すみぬ。

○美濃の國に石谷とて侍あり、齋藤山城守と同心にて鷺山の城に籠れり。寄手は齋藤新九郎とりまき、やう〳〵落城におよぶ砌、かの石谷文武に心がけの功あるを惜しみ、矢文を射、使者を立て、是非出られよ、未練にはなるまじきよ。ことわり返しに、

いのちやはうきなにかへん、世の中に
ながらへはつるならひありとも。

同じ時妻女のかたへ、

なびくなよ、ませの内なるをみなへし、

二字飜案に返し、

男山より風は吹くとも。

なびくまじ、ませの内なるをみなへし、
をとこ山より風はふくとも。

と書きてつかはし、國の内花藏院といふ比丘尼所に走入つて、むなしきあとをとゞめしとなり。

○備中の國高松の城主清水長左衛門宗治といひし、先の太閤羽柴筑前守殿の時、大軍をもつて水責にし給へば、諸勢の命を乞ひ助け、小船に乗り、河にうかび、切腹の時、

をしまるゝ時散りてこそ、世の中の、

花も花なれ、色もいろなれ。

○伊勢より熊野へ参詣の武士あり。おとなしの天神といふあたりにて、一本の梅さき、ふかきにほひのもれ來るを、供したる人夫とりあへず、

音なしに咲き初めかゝる梅の花、
匂はざりせば、いかで知らまし。

といひけるを、主人聞き付け馬上より、其の者のいにしへを問へば、

花ならば、をりても人のとふべきに、
なりさがりたる身こそつらけれ。

とよみし。いよ〳〵主人感にたへ、やがて侍になし、身ちから情

をかけつるとなん。

○久しく相馴れし夫婦の中に、おもひよらず爭ふ事ありて、妻にいとまをやりぬ。家を離れんとする日、けしからず大雨ふりしかば、あひ馴れたるわりなき友あつまり、いたはしやなどいふに、

降らばふれ、曇らばくもれ、照るとても、
ぬらさてゆかん袖ならばこそ。

と詠みしをあはれと、え去りがたくてとゞめけるこそ心あれ。これを誰そとしづかに聞けば、和泉式部がいにしへ丹後の國にての事とかやいふ。

○丹後の國に鉈の庄とてあり、かしこの百姓、同じ百姓に米を貸し

ぬ。乞へどもつひになさず、狂歌をよむ、

しやくせんを、乞へどもくれぬ氣のどくや、

なる木に鉈の庄のものかな。

幽齋公御聞きあり、其の風情なる土民の上には、何としていひけるぞ、やさしやと感じ給ひ、米を三石つかはされし。恭しとて御禮に參り、御座にてなにぞ申せとあれば、

日本さへおよびなき身に、三ごくを

まゝにせよとの御意ぞめでたき。

○江州坂本にある母の許へ、年の暮の文に、叡山より兒の書きてやりけるは、小袖一重、料紙一帖、帶一筋參らするとあり。使に問へ

ば無し、重ねて見參の時、その趣旨を母問はれければ、我がおとなしく寺の主になりたらば、それ〳〵を參らせたいとの事に候ふよ。

○博奕の上手二人、一度に死して炎王宮にいたる。青鬼ありて先に通る者をとらへんとすれば、私は辯說なし、おとほし候へ。後なる者口きいたり、なにも御尋ね候へと申すにぞ、さらば二番の男をとらへ問はんとて、赤鬼立ちよりたりしを、彼のばくちうち、鬼の尻をそと知らぬふりして抓りけり。鬼がいふ、爰な人は晝なかにと。鬼も十八といふ事あれば、おくゆかしや。

○後柏原院崩御なされし時、三條の桶屋が娘、

およびなき雲の上なる歎にも、

天が下とてぬるゝ袖かな。

上戸

○尊氏將軍五世の孫義政公の御時、洛中洛外酒を禁じ給ふ事あり。万阿彌とて同朋のさふらひしが、いかゞして呑みたるやらん、つらもどこも赤漆にてぬりたる風情なるが、御前に跪きたり。大樹御覽じつけられ、おのれは酒を食ふた面ぞやと仰せあれば、いやあまり寒さまゝ、罷出てさまに、たき火にあたりて御座ると。さあらばこゝへうせよ、嗅いで見んとあり。是非なうて參りたれば、かくれがない、熟柿くさいはと御詞の時、万阿彌、さやうなる儀も御座候

ふべし、柿の木を焚き、火にあたり參らせたほどにと。

○伊勢參の坂向ひに出でたる者内にかへり、胸をなで額をとらへ、あら苦しゝと、時すぐるまで悲しがるを、利口なるむすこあり、てゝはそれほど苦しい酒を、よいころに飲みもせてと申しければ、目を見いだし、おのれはこざかしく何を知りがほに。此の酔のさめんが苦しやというてあそぶよ。

○亂舞時過ぐる酒盛に、正體なく呑み酔ひたる者、惣いに家に歸らんと思ひ、たどるゝ歩みたるが、ころしも師走寒のまへ、雪も霜も白妙なる水堀のあゝしをわたりかゝり、ひたもの踏みまよひ深さ處に入りぬ。やうゝ首際ばかりなる水に溺れながら眠りねたれば、

氷身をとぢても知らず。やどには人皆歸りたる、なにとて遲きぞやと、あたりの者までもよほし行きて見れば、堀のかたへに人の頭の見ゆる。立ちより氷をうちわり、言葉をかけければ、件の客人、誰そ、夜も明けぬに門をたゝくは異なやつといふ。

○主君たる人の酒につよきあり、機嫌のよき時小姓に、われをば世上に上戸といふか。いやさやうには申さぬ。下戸といふかや、いやその方のさたも御座ない。すいしたゝ中戸といふらう。いやさ申す噂もおりない。さてなにと言ふぞや。唯だ世上には底知らずじやと申すと。

○年の内の立春に、目出たしとて奉公の衆おの〳〵出仕をとげけり。

即ち飯器を盃に出し、これにて一つづゝのおつもりとさだむ。古老の人二盃うくる、それはなにとてと咎められ、畏りて候、

年の内に春はきにけり、一とせを、
去年といひわん、ことしやいひわん。

と吟じて、時の興をぞもよほしける。

○小機嫌のよき折節、ざんげものがたりをしけるが、ひとりいふやう、此の五體をつくる神にても佛にてもあれ、あつらへたい事があるは。なにたる望ぞや。されば上々の酒をのむ時、しづかにかみくだき吟味せんとたくめど、いかにも口へ入れば、そのまゝ咽喉へざうさもなくはしりこむ。あまりに殘り多し、鶴首のやうにつくり

て持ちたいと。

○何にか思ひたちけん、一期酒のむまいと神文し、廿日ばかり後頻りに呑まんといふ。女房、こは勿體なし、天命をばいかゞと教訓するに、いや神明は人の心を見ぬいて、何としたりとえ悔へまい、やがて呑みたからうものをと、とくから知ろしめされ、けつく大慈大悲の御むねなれば、一つ呑ませたいとこそ覺召されんずれ。

人はそだち

○質屋の娘嫁入し、夫婦の仲もよかりしが、假初の事をも九々のことばをはなさず使ふ。たまさかなる客の前にても、とかく九々にて

物をいふ。せんかたもなき耻かしさに、かの女をば去りてけり。妻家を別れ行くにもなほ稚きよりいひ學びたれば、三四十二にて去らるゝよと。

四四十六で子をまうけ、四五二十にて嫁入し、

○大名のもとに能あり、人あまた見物に行く。内はつまり、高塀のそとに居て、はやしの音ばかり聞く。晝の過に芝居へくばる饅頭の外へおちたり。山ふかき奥にすむ者ども見つけ、是れはいな物や、唯今生れたげであたゝかな、天人の玉子であらうず。さらばあたゝめて卵をわらせうとて、綿につゝみ、懐にもちありく。日をかさぬれば青くなるまゝ、天人の玉子ではない、むくりこくりが玉子にてあらうず、卵をわらぬ先に殺せと、雁股にて恐れ〳〵射さりたり。

されば こそ申さぬか、中に黒血のかたまりが候ふは。

兒の噂

○ふるまひの菜に茗荷のさしみありしを、人ありて小兒にむかひ、是れをば古へより今に至り、物よみおぼえん事をたしなむほどの人は、みな鈍根草となづけ、物忘れするとてくはぬよし申したれば、兒聞いてあこはそれなら食はう、食うてひだるさ忘れうと。

○貧したる坊主の眠藏より餅の半分あるをもちて兒にさし出す。請取りざまに、

十五夜のかたわれ月はいまだ見ぬ。

とありしに、師の坊、

雲にかくれて、こればかりなり。

○ふけ人の來りて兒に向ひ、法印はいづくに渡り候ふぞと尋ぬれば、護摩堂にかさして御座るは。かさとは何事ぞ。經陀羅尼をよみてといふ事よ。それをばかくきんとこそいふ物なれ。わこもそれほどの事は知りたれど、ひもじさにかんともきんともいはれぬは、

ひだるさと、寒さと、戀と、くらぶれば、

はづかしながらひだるさぞます。

○ある時宗長笠寺に參られし。坊中に立ちよれば、兒のありしが、ちうと木のそらに上るを見つけ、

さる兒と見るよりはやく木にのぼる。

やがて兒、

いぬのやうなる法師きたれば。

○比叡山北谷持法坊に兒あまたあり、冬の夜豆腐一二ちやうをもとめ、田樂にするに、老僧いひ出されけるは、おの〳〵秀句をいうて食ふべしと。大兒やがてわれは佛のつぶりと申さん、みくしとりてのく。またひとりは八日の佛とてやくしとりたり。後に小兒屏風のかげより出づるを見れば、髪をばつとみだし、たすきを掛け、左右の手にて目口をひろげ、われは鬼なり、みなくはうとありたげとりければ、詮方なさに坊主は古手拭を頭にかぶり、手を指出し、乞食

に參りた、一つあておもらかしあれと。

○兒より合ひのさんげに、大兒は虱が鳴くものならば、いかばかり人中にてはづかしからう、せめてなかぬで恥をかくすと。小兒は、いやわれは虱を鳴かせたい、其の間なりと食はれいてくつろがう。

○延暦寺にて下法師山へ行く時、兒にいふ、畫の飯をば棚に置きたり、九つ鳴りてあらばまゐれと敎へぬ。彼の下僧案の外常より早く、畫以前にしまひてかへる。されば兒の飯なし、是れは不審やと問ふ。疾く早や食うたと返事せらる。いまだ九つは鳴らず、いかてかと申せば、いや今朝五つ、さきに四つうちたれば、九つ鳴つたほどにそれに食ふたはと。

詮ない秘密

○田夫畠を打つをりふし、隣郷の百姓とほりあはせ、これはなにを蒔くぞといふに、彼れは、あ聲が高い、ひさゝやう〳〵といふ。さては世に稀れなる物の種をも植うるにやと思ひ、心得たりと近くよりたれば、いかにもおのれが調子をひきく、大豆を蒔く、鳩が聞くほどに。

○二郎太夫といふ百姓夫婦ともに連れ、河内の國今田の市にたつ。人多くあつまりたる中にて、知人に行きあたり、さても二郎太夫はといふに、其のまゝ返答におよばずはしり寄り、そと物をいうて給

はれ。誰そにかくるゝか。いや息子を内に寢させて來たが、若し聲の高きに目がさめうずらうと。

○義經東國下向の時、一夜の宿をかられけり。辨慶あるじの女房に、子はいくたり候ふぞと問へば、ていゝの子六人、母の子六人あはせて九人候ふとこたへしを、何とも當座にあたらず。明の日も案ずるとて、辨慶道を七里あゆみおくれたるとなん。これはていゝに始めの腹の子三人あり、母にも始めの夫の子三人あり。今夫妻の中に三人出來たり。ていゝに別けてみれば六人、母に別けて見れば六人。されどもきはまりは九人。

椎はちがうた

○久我繩手を葦毛、馬鹿毛、河原毛の三匹に荷を負せて行くに、宗長後や先やと歩まれし。馬追者のいひけるは、お坊主何か知り給ひたる。歌道に心がくるよしあれば、其の儀ならば此の馬三匹をおもしろく歌によまれよかし。

雨ふれば道あしげなる久我繩手、
月かげに去らば、末はかはらけ。

○一休伊勢の淺間にしばらく住山ありし。常ならぬ人の樣に沙汰しあへり。山田の宿主たる人、親のこゝろざしをつとむる時、齋をま

ゐらせけるに、白衣にて度らせ給ふ。見るより驚き、これはいな者や、不思議の風情なるかなとさゝやきぬるを聞きて、齋をはりに硯と紙とを乞ひ、

さたりとよ、心の内の墨染を、
世はたり衣うへにこそきね。

○如何にもきつき姑の死したる時、嫁歎き、涙を流す事かぎりなし。さても奇特や、常は中も惡しきよし聞きつるにと人々云ひ感じければ、さればとよ、此のまゝにて死なれたらば、如何ばかり嬉しかるべきに、若しまたも生きかへられたらば、其の時の心うさいかがあらんやと思ひやられてさへ泣くなりとぞ。

○おどけ者天王寺の石の鳥居を見、我れは此の鳥居を造作もなくきりおとさんといふ。そばにある者なにとしてきりおとさるゝ物ぞやと爭ふ時、件の男鳥居の上に上り、笠木の馬のりにして居けり。はやくきりおとせといふ時、則ち腰より錐をぬき出しておとしたり。取りて見れば、四つ目錐なり。これはと問へば、さればこそ石の鳥居を錐おとさうといふたはと。

○繼母にそへる子あり。彼の子をなつけて人のとふ、なにと今の母はいたいけにはごくむ事あるや。七つ八つなる子が返事に、われを養へるは、雀子をかふやうにせらるゝと。さて〳〵奇特や、繼子をばにくむものなるに、ためし少しと感じければ、いや物をいかにも

ちとづゝくれらるゝ、多く食うたらば喉に、うろがてきやうかと思うてやら。

まゝ母のもりたるいひは、ふじの山、
汁をかくればうきしまがはら。

○瓦やく者の近所に天下一のみめわろき娘を持ちたる人あり。彼の娘廿四五にて死にたり。瓦やき彼の親のもとに行き、大いに泣く。何事の愁にさほどまで悲しうやと問ふ時、いな此の後鬼瓦の手本がなうなりて、力おといたと。

○關役所の難を遁れんに、つくり山伏にしくはあらじと、信長公天下をしらせ給はぬまては、皆其の相をまなべり。さればにやある者、

都は見たし、關々をつくろはんやうはなし。兎角このまゝせんと出て立ち、東より上り居しが、駿河なる清見あたりにて、馬に乗りたる山伏強力七八人さゞめき下る體を見付け、南無三寶先達にてやあるらん、さなくとも常の事にてはなさゝうなり。とがめられては耻ぞと思ひ、横道へかくれ、彼のときん鈴懸をぬぎ、ふるう〳〵大路へ出て見れば、先の山伏一人もなし。是れはいな事やと思ひける。上より下る馬上の山伏は、向ふより上るこそ本の山伏よと見やり、我れはまさしき作り者なるに、咎められては如何せんと恐れ、へり道し、いかめしき道具どもをば脱ぎてもたせつるこそをかしけれ。

○慈照院殿に召しつかはるゝ、明陶子、淵用白、干陽朱といふ三人

あり。聞く人不審し、さのみ藝能のあるとも知れず、其の形も一廉すぐれたる體なし。いかさま義政將軍の御意に入りたる事のあるにや、聞きのごひたる名やとさゝやき噂しける時、万阿彌御前に跪いてさふらひしか、いつより御氣色快げなるを見奉り、右三人の名の樣子を伺ひ申したれば、打ちゑませ給ひ、別の趣なし。明陶子は萬事才覺比類なき者なり。されども妻に恐れ遁げ廻ると聞く、さてぞめいたうしとつけぬ。淵用白はとる手はうがくもなき者なれども、椽のすみ〳〵敷居のあたり、微塵もなきやうに掃除をよくするゆゑに、えんようはくと付くる。干陽朱はこれも十方手のあきたる無藝の者なれども、酒のかんをする事を得たり。右曲、左曲、虎の

尾などゝ、ゆげのたつやうを見て出すに、少しも仕そこなはねば、酒のかんをようするとつけたはとおほせられし。世の常古事のあるべきやうにすゐしたりしは、ちがうたりとて人皆笑ひけり。

○或處に禪門目の上に大なる瘤をもてり。悲しさながらせんかたなく過ぎこしけるに、人の語るやう、そこの里にすむなる老人、山路を通ふとて、道にて鬼に行合ひ、年頃うるさかりし目の上のこぶをとられ、一門眷屬までよろこび限りなしといふを聞き、あながちに是れをうらやみ、はる〳〵と其人のもとをたづねあひ、ありしおもむきを尋ねきはめ、瘤をとられん望に、彼の辻堂に行きまち居けり。案のごとく何とも知れぬ者ども夜更け多くあつまり、どしめきのゝ

しり、酒宴をはじむる時、禪門圓座を腰につけをどりければ、また聞くなり、約束をちがへず來りたるが嬉しきに、以前の瘤をとらせよといふまゝ、ひしとうち付けたれば、思の外なる禍をもとめ、瘤二つのぬしになりて歸りぬ。

うそつき

○播州に風の神とて宮あり、下り船頭宿願して、唯だ風をこふ。五日六日過ぐれども吹かず。其の感應なき旨を社人にことわりければ、巫、されば、さるかたよりの元より風を所望あるまゝ、先づ其の風を吹かせらる、此の次はやがて其の方望の風を吹かすべしと。

○明暮うそをいひまはりたる者の方へ、思ひよらず客あり。常に淺ましき小ども二人つかふとて、一人の名をば十人とつけ、一人の名をば五人とつけ置きたりしが、客の聞くやうに聲を高々と、やい〳〵十人は山へ薪しにゆけ、五人は藪の竹をきれと。

○京邊土の事ならば幾度も見たが、やまひて知らぬといふ處はなし。世の中の人の見たなといふは、白河を夜舟に乗りたるたぐひならん、某がやうに見覺えたる者はたるまいと思ふ。うらやましや、さて祇園と清水との間は、いかほどの遠さぞやと問ふ時、扇に書いたる繪、をひろげ、それは一寸ほどあらうまてよと。

○神妙にもなき人あつまり居ける中に、一人いふ、そなたたちのうち

に、雷の鮓を食ふた人があるか。いやなし。左右あらう、まれなものじやほどに。してそちは食うたか、中々くうた、味は甘いか、酸いかと問ふに、ちと雲くさかつた。

○伊勢の國をのぞきたる事もなうて、いくたびも參宮したるよしはなす者あり。そちはさい〳〵伊勢へと聞くが、さこそ海老を澤山に見られつらうこそ。宮川で見た、色が赤うて見事にあつた。海老は海にある物なり、生得色はあをく黑し、いりて後こそ赤けれ。宮川は河ではないか、うそさうな。いや御身はせばい事をおほせある、物ずきがありて海老をいつて、河へはないたやら、お知りあつたか と。

○ちとうつけにて、しかも富める人あり。常にともすれば腹鳴る事けしからず、是れは何としたる病やと人毎に問ふ。口きゝて物しらぬ者云ひけるやう、昔鳴る神が味噌桶の中へ落入り、上らんとすれば、やはらかにて足のふみどよわく上り得ず、其のまゝ死したるが香の物になりたり。めづらしやと奔走しくひけり。それを食ひたるほどの者の腹がなりやまざりつる。今も不斷そなたのごとく腹のなるは、彼のなる神の香の物くうたる子孫にすんだと語りつれば、病者大きに満足し、さては我が腹のなる事たゞならず、家の面目なりと慢じてすみし。

似合うた望

○瓦おち軒くづれ、とびらはありし名のみにて、舊苔道をあつくとぢ、藜藿ふかく茂り合ひ、枕にすだく蟲の音も、きけば浮世にあきはてゝ、時雨も雨もすぐに洩る門の下にて身を過ぎし貧人のいふやうは、我がねがひは、白銀を今一貫目ほしや、たゞ此の屋根葺いて住みたやと。

○數人あつまり居、おのが心々の望を詰りつるに、一人がいふ、我れはたゞ生れつきたる兩眼の外に、目を三つ欲しい、一つは背につけ、だしぬき暗討の用心かた〳〵後の方を自由に見たい。一つは膝

頭につけ、夜陰の歩行あやまちなからん。一つは手のたけたか指の先につけ、能の時または風流何にても見物の時、人の背丈にかまはず、手をさし上げて見たいと。

○和泉の堺に一町々々に御用心と名をよびて、夜番するもの一人づつ必ずあり。其の朋輩ども四五人あつまり、ざんげの夜がたり時うつりけるに、南中の町の夜番が申しけるやう、我れは金子を十枚もちたや、乗物に乗つて、御用心が呼ばりたいと。

○都に候ふ乞食ども、暑月の夕すゞみ、木の下に頭を並べ、今こん盂蘭盆をそちどもは、いづくにて送らんや。ちと處をかへ、堺の津に行き仕舞をせんは如何にといふに、尤もと同じ、五六人づれにて

下り、爰に到れば、其の寺の乞食あり、かしこに赴けば、其のところに貫ひつけたる乞食あり、施餓鬼につけ霊前の供につけ、一飯も京の乞食の所得なし。すゞ〳〵と京に歸り上る。似たる友の乞食行合ひ、堺にての様子は何とかと問ふ、其の事よ堺へ下り、ざつと乞食になつたと。日比は我身を何と思うたぞ。

○連歌師のもとに奉公したりし小者、今度は町人かたに居けり。友たる者尋ねる。今は夙に起きず、宵よりいねて心やすきかやといべば、そちがいふごとくなり、さりながら今の亭主も、時ならずうかと空を詠め〳〵するが、わろうしたらば、あれも連歌師にならうかと思うて案ずるよと。

廢忘

○貴げもなき出家の檀那と、一つ席によりあへる事あり。僧二聲三聲さやつ〳〵と喉をかすりけるに、麁忽に魚の骨いてたり。坊主其の骨を手にとり、あらふしぎや、是れは誰れが食うたる魚の骨であらうぞと。

○或る僧新しき小刀の大きなるをもちて、鰹をけづり居ける所へ、知音の人おもひよらず來れり。あまりにとりみだし、小刀を鰹と思ひいそぎてかくし、鰹を小刀と思ひさし出し、此の比關の小刀をもとめた、御覽ぜよとぞ申しける。

○我が秘藏の紫小袖が見えぬ、しかとそちが盗みたるといへば、いやとらぬ。さりとては證據人ありとつよくいふ時、とりはせぬ、人の見ぬにもらうたと。

○若き座頭のよばひして、垣へのぼり越えんとする處に、折節月のくまなき夜、亭主見付け、座頭は何事にといふ時、天にのぼりさうよと。

○京にていづれやらん、當宗の寺に日念上人といふありし。其の弟子のいふ、是れは不審な、念佛の念の字ではなきかと。いへ〳〵法然の然でこそあれ、なか〳〵念佛の念ではない。

○京邊土にてある東堂の細工に、蟹ぴしほをするとて、鹽一二升を

用意し、ふりかけ居らるゝ處へ、ふと檀那來れり。さてもよくぞおはしましたる、内に人のはぐらみのいろを見せ參らせたやとこそおもひ候ひつれ。其の故は愚僧がじんせつのだんな、尼ケ崎にあり。某つかふ程は鹽をつゞけてくれんとの契約なり、されども道の程遠げれば、人馬のありきは造作なる條、いつも蟹におふせて送らるゝ、これ御覽せよとぞ申されける。

謠

○佛には毛があるかなきものか、いやない無げ光佛とあり。いやある、けぶつぼさつといへり。互に論じて堂の坊主に判斷をうけけれ

ば、有るにあらず、なきにあらず。それは何事ぞ、熊野の謠に末世一代けうす（教主）の如來とつくつたほどに。

○楊貴妃をつくるほどの者が、比翼の鳥とはなんぞや。目のまへにある事を知らいて、ひよどの鳥とこそよけれと。

○高雄神護寺の文覺は、聲の高い人であつたといふが、あらぎやうをせられた奇特かよと。聲の高いといふ事を今迄は聞かず、書物にあるか。勿論誓願寺に、虚空にひゞくはもんがくのこゑとつくつたは。

○あの幽靈といふ者は、何とて足袋をほしがるぞ。實にや死出の山、刀山劍樹の嶮難にも入るものかや、不思議なる事かなとひとりごと

にいうて感ずるものあり。そなたはいつ幽霊にあうて、足袋をはいたるをば見たぞと尋ねければ、いや是れは過ぎつる夕ぐれに、あの松かげの苔の下なさあと弔はれ参らせつる、松風村雨二人の女の幽霊これまで参りたりと。あれは彼の兄弟の幽霊にはすんだぞとよ、其の二人は僧にあうて、我が跡とひてたび給へと乞ふたはさて。

○津のくに兵庫の浦にて、祭禮の能ありしに、舟辨慶のはてに跡白波といふを、やれ不吉やと思ひ出し、太夫聲をあげて、跡くらやみとぞなりにける。

○田舍人の上洛し、宿主にむかひ、某が京のぼり一世の始に候。いづくをありき、何を見ても合點ゆかず候ふまゝ、いそがはしくとも

連れてありかれ、處々を教へてたべ、故郷にかへりみやげにせんなど懇に語ひ出づる。まづ四條の橋を通るに、是れこそ謡にうたふ四條の橋、あれに見ゆるは五條の橋の上に候ふよ。さてもうれし、熊野にある名所を見たる事や。して〳〵其の老若男女といふ處は、やがて此のあたりにては候はぬか。京の案内者も一圓不文字にありければ、理がすまいて返事するやう、其の老若男女は三年あとの大洪水にみな流れたと。

渡りえて、うき世の橋を詠むれば、

さてもあやふく過ぎしものかな。

○異な者どものよりあひ、小野の小町は美人にて、桃花雨を帶びた

る風情ともほめ、歌の道世にすぐれ、おうなのすがたになぞらへ、よわ〳〵とよみたるなどほめけるが、勿怪な事は、氣が短慮に酒にゑうては人とからかひ、垣壁をも打ちやぶり、らつしがなかつた、大疵といふ。上戸とも下戸とも、短氣とも知らざりし、そちには誰が語りて聞かせたるぞ。關寺小町を聞き給へ、垣に喧嘩をかけ、戸には酔狂をつらねつゝと。（垣に金花を懸け、戸には水精を連ねつゝ）

○なにといはれに、昔は花になく鶯、水にすむ蛙を始め、馬などまで歌をばよみたるぞ。人倫たる身をうけながら、五文字、七文字のわかちさへ知らぬはと。歎くやさしの心はやゝさりながら、馬の詠みたる歌はいまだ聞かず。

世の中にさらぬ別のなくもがな、
千代もといのる人のこのため。

これこそ馬のよみたる證歌ざらよ。これは業平のにてはなきか。念もない、熊野に、そも此の歌と申すは、長岡にすみたまふ老馬（老婆）のよめるうたなりとこそ。

頓作

○釋の頓阿、桑門の風情し、内裏見物の折節、ある殿にて座敷より、修行の僧はいづくの人ぞ。東の者にて候ふとあれば、乃ち、なにかあづまのはての思出と。

あるに、頓阿、

都にてまづかたるべき富士の雪。

さらば座敷へと請ぜらるゝに、禮もなく座上になほられたりければ、

また、

いやしきものはうへを恐れず。

とあり、頓阿言下に、

水鳥の浮べは月の影ふみて。

○天龍寺の開山夢窻國師は超過福僧にてまします、僧形如何にも肩うすくすぼみたり。人許顔を遂げ言上するやう、世間に貧窮の輩を

ば、なべて肩のうすい者とも、また無力すれば肩がすぼうだとこそ申し傳へて候へ、夢窻の御肩輿ざめてうすくすぼみたれど、福分におはしますは如何と。されば、予が肩あまりにうすくすぼみて、貧乏神の居所がなきによとの給へり。

○幽齋公印或ところへ立ちよらせ給ふに、家老の人立出で、挨拶仕り、其の坐の脇に机に手習ふ雙紙あり。取りて御覽すれば、それは我がせがれの清書にて候ふと申したり。さて〳〵奇特なとほめ給ひつれば、御覽じ候ふかな、みなさやうに仰せ候ふといひすて〻奥へ通りたる迹に、

なら坂や、此の手をほむるおやごころ、

とにもかくにもうつけ人かな。

○京の町にてしだれ柳の物見なるをもちありく、人此の柳を見付け、ことわりもなくをりてとる。こは何ぞ狼藉なり。知らずや柳はみどりといふ事を。實に尤も通理ありと、乃ち棒をもつてかれが鼻をはりたり、大いに血ながる。これはと怒れば、これこそ鼻はくれなゐに。

○或人紺屋に來り、これの亭主を上手といふは實か、此のきる物の形に笛の音をつけてくれよといひすてゝ歸りぬ。しばらく工夫し、上に日の丸、下に鑓をつけ、後あつらへたるぬしに渡す。是はといふに、別に仔細なし、笛の音はひやりゝと吹くほどに。

○堺にて質屋に米を十石入れ置き、錢をもちて來ては、其の代ほど

米をもつて行き、度々の注文通に書付け、借主に遣はす。或時錢をもたず來り、一石たゞわたして給はれといふ。質屋心安くおもひ、通につけずして一石わたしぬ。月廻り、あり錢を持ち來り、殘らず米を受取らんとするに、質に置きたる米一石なし。かりぬし盗人をいひかけ、結局もとの置きたる米にてなくば請取るまいといふ。其の時亭主まづ錢を見んとてたゞもの選り、一文もとるべきなしといふ。何事にやと尋ぬれば、我が貸した錢が一文もない、もとの米でなくばとるまいとなり、我ももとの錢でなければ取るまいと。此の作意分明なるかな、是にてこそすみたれ。

○太閤御所風呂に御入りありつるを、蜂屋伯耆守御垢にまゐらんと

て、ふかれけるやう、知行くれい〳〵〳〵と、拍子にかゝり興をつくされし。其のまゝ蜂屋をとらへ、是非ふかんと仰せある。さま〳〵辭退せらるゝを、無理にふかせ給ふやう、奉公せい〳〵〳〵〳〵と、作意のはやき短舌にのべがたし。

○京に智玄といふなま物しりなる者あり。惠林といふ學者と東寺の門前にて行き合ひ、智玄はいづくと問ふに、持ちたる扇をあげ、爰へ行くと答へたる時、それはあて字なりといへるに、詞なし。扇をあげたるは一字をきり、鳥羽へといふ事なりし。早察してあて字なりと打たる非だち奇妙々々。

○紫野明月橋にて或る俗一休和尚にむかひ、明月橋月なき時如何。

和尚幸ひに大燈之灯あり。

○雄長老霜月の半ば、四條の橋を渡らる。河上に法師一人水につかりて居たり。あはれさに立寄り、國はいづくぞ。下野のものといふ、修行とて、水に腰よりしもつけの、

なす野のはらはいかにくだらん。

○名護屋陣にて太閤御所具足をめし、舟より海をのぞかせ給ひ、我が影のうつりたるを御覽じ、

海の中にも武士ぞありける。

と仰せければ、乃ち紹巴、

釣針にかゝりてあがる甲貝。

○宗祇修行の時、山中にておもひよりなき人三人行きむかひ、一人いふ、

一つあるもの三つに見えけり。

卽ち、祇公、

○たぐひなき小袖のえりのほころびて。

また次の者いふ、

二つあるもの四つに見えけり。

また宗祇、

○月と日と入江の水に影さして。

また一人がいふ、

五つあるもの一つに見えけり。

また祇公、

月にさす其のゆびばかりあらばして。

右三句ともに聞いて後、三人いづちとも見えず失せにけり。

○西行法師修行の時、津の國七瀨の河にて、麥粉を食うとて、しきりに咽ばれけるを、馬上より侍の見付け、

此の河は七瀨の河と聞くものを、

お僧を見ればむせわたるかな。

時に西行の返歌、

此の河は七瀨の河と聞くものを、

めしたる馬はやせわたるかな。

○旅人在所の者に、此の川をば何とかいふ。あゐそめ川と答ふ。さらばこれを染めてたべと手ぬぐひを差し出す。乃ち請取りて水に入れ、ひろげわたす。何とも色はないの。いや水色にそまりて候ふはと。

○越前と加賀の一向衆と取合ひの時、朝倉どの或る會下僧にむかひて、敵も八幡大菩薩、味方も八幡大菩薩と念ずる。其の一念の一般利生は如何にとあれば、僧いふ、味方は現世安穩、敵は後世善處と守らんとぞ答へける。

○此の迹は大名にて威勢ありつる人なれども、忽ち落人となり、宿

かりそめの寒夜に、身はすくみかねのごとく冷えわたれば、古疊を被ていねられしが、狂歌、

淺ましや、世はさかさまになりにけり、
人にしかるゝものにしかれて。

○幽齋法印の御内なる松井といふに振舞を御沙汰ある時、たびく人をつかはし給へど遲れ、料理の者、鹽鯛のやけ過ぎて、如何とかなしめば、いや昔よりありし事よとて、

こぬ人をまつ井の浦の夕食に、
燒きしほたひの、みをこがしつゝ。

秀句

○京の町にてちひささあしだを賣る商人、こあしんだ〳〵というて先に行けば、其の後から菜を賣者のつゞきて、なかう〳〵と。

○座頭の琵琶おうて來るを見付け、おどけ者が、なつとの坊はいづくよりいづくへおとほりぞ。わらの中にねもから、糸ひきに行くと。見たところ、うまさうなりや此のちやのこ、名はから糸というてくれなね。

○石上の松は坐禪の僧に似たよ、ねいりもせず、うごかぬ程に。

○津の國に多田といふ在所の同じ近里に役所ありしに、人足二人とほる。關守のとがむれば、先に行くもの、是はたゞの夫(忠信)にて候ふと。關守、とあらば屋島の軍をかたれ。それはつぎのぶ(嗣信)にお尋ねあれと。

○或る僧、冬扇を持ちければ、雪中の扇になんの役かあらん。僧しばらくありて、扇をつかひ、當話につまり、汗がいてさうよ。

○見ぬ戀をする時、あつぱれ敵の城かな、せめて見たい。

○百姓の福力なるあり、惣領の子才智あれば、笛を稽古させたり。明暮、謠の、小鼓の、大鼓のとて、出入のたゆることなし。祖父は隱居の身ながら、こはそも何事ぞ、稼穡の艱難を忘れ、紡績の辛苦を無になし、我が家の事業をばよそに見て、身代のはてんするをか

なしみ居けり。かくて三年過ぐる冬十月藝者あまた集め、おびたゞしきはやしを興行する坐敷へ、頻りに祖父を呼出せば、辭退もかなはず出てぬ。孫一番吹いてどつと賞め、人みな聲をそろへ、さて祖父の歡喜さこそなどとりはやしたるに、祖父、されば人の耳には笛の音のなにと入り候ふや、我れが耳には田賣らう〳〵とより外、別の音はいらぬと。

○夏の天に數日雨なうて、民家旱損を歎く。氏神の社頭に、風流をかけ雨を乞ふに、一滴もふらず。いつゝ降るが奇特やなど沙汰しあへり。かたくなる宿老うちうなづき、今度のをどりが、うらは一向氣にあはなんだ。なにか大鼓をばてれつけ〳〵てつてれつけとう

ち、鐘をばてんき〳〵やとたゝいて、笛をひよりやひよりと吹いた物、何として降らうよ。

祝ひ濟んだ

○右大臣信長公或る年の元日、曉ざうにのお膳すわりけるを御覽ずれば、箸かた〳〵あり。これは何者のしわざぞとて、大いに御氣色かはれり。大相國いまだ木下藤吉郎殿にて御座の時、お機嫌あしきはさる事ながら、當年より諸國をかたはしどりになさるべき瑞相なりとありければ、これにて御腹立やみぬ。案のごとくその年より國〳〵をしたがへたまひきとかや。

○同じく信長公へ諸大名おの〳〵元日の出仕ありつる座しきにて、仰せあるやう、こよひの夢にいづくともなく出陣のこゝちして、一宿よろこびて馬に乗ると思ひつれば、乗りたる馬の足四つながら折れて、危かりし體を見たはと御諚あるに、誰も有無の返答なし。また藤吉郎殿とりあへず、千秋萬歳の御夢なるべし。そのゆゑは、合戦をなさるゝたび、いつもかち武者の御名一天にとほらせたまふべき御告とこそ存じ候へとのたまひしが、まことに戰のあるとなれば、勝ちたまはぬはなかりき。

○古へ道三信長公へ始めて御禮に出てらるゝ。進上に扇子二本もたせられし。御前に候ふ人みな、あら些少のいたりやといふ氣色なり

き。時の奏者に言上あれ、これは目出たう日本を御手の内に握らせ給ふやうにと。

○元日いまだ夜ふかきうちに、萬物をうりかふ人、えびすを求めむかふる事は、聖德太子よりさだまれり。さるにより町々をもちてわかゝえびす〳〵と呼ぶ、これをのぞむ者うけてよろこぶ。彼のえびすのはん木をする者、いろ〳〵人の貴むほどのすがたをおこしてもちたりしが、師走のいそがはしきにやとりまぎれけん、えびすと思ひて持出しけるか、三途川の婆をすりたるを取り違へ賣りありきぬ。明方に受くるものゝ見付け、これは異な姿ぞやといふを、賣主も見れば、うばなり、肝を消しながら、おくれぬ顔していふやう、これ

こそ惠比須のおふくろにて、殊更にめでたしと祝ひければ、げにもわかえびす殿も、おふくろがなうてはいかであらん、福のみなもとこれなりとよろこびて、いたゞきをさめけるとなん。

○若狹の太守武田殿、無緣の出家をかゝへ置かれ、寺など建て、憐愍あさからず。されども其の家の事を知る人正路ならず。何を送らるとも或は半分、我は三分の一つかはし、中にて殘す。彼の會下僧もよく知りながら、さすが國主へ申上ぐべきよしもなかりしに、ある年の暮正月の菓子に胡桃を千送れとあり、然るを五百八十やりたり。僧不審に思ひ、一首の狂歌を參らする、

下さるゝくるみの數も、君が代も、

目出たかりけり五百八十。

太守代官を召し出し、くはしく穿鑿あれば、あやまる處紛れなかりつれども、これは祝儀の歌をよまれし僧の心を感ずる條、今度の科ばかりはゆるすとありし。

○商人のならひにて、正月は藏の内に心ず鯛をかくる例あり。これをなん傳へてかけこだひといふ。或者の藏に、目のぬけたる鯛をかけておけり。亭主元日の朝見つけ、大いに機嫌をそこなふ時に、こざかしき中居の出でゝ、ことゝしてなたのお仕合は殘る事なし、何事もおめでたいといはうたり。

○故相國駿河の御城出來たるいはひに、三百韵の連歌興行なされし

時、板倉六右衞門入道正佐、卷頭の發句に、

なみ木たゞ花はつきゝのさかりかな。

とありければ、相國大いに御感ありて、乃ち其の懷紙をもたせのぼせ、玄旨法印へ見せ參らせられしにも、稱美斜ならず候ひし。されば右の發句ことばの縁にたがはず、御子孫はんじやうのめでたさ、もつとも祝ひすまいた。

醒睡笑 終

此の草紙はいまだ櫻のみどりごの、年は十になり給ふといふ春、御父周防守殿の御前にて、我よむを如何にも神妙に聞きおはします風情、栴檀は二葉よりの感に堪へて候ひきに、またかこひにて茶をたてられ給ふたるしほらしさ、はかりなければ、生ひたゝせたまひて目出たう榮え、すゑはんえいあるべきいろまでも床しく見及び、此書をかきて贈り侍るめり。

寛永五年三月十七日

板倉侍從殿

參

前誓願

安樂庵

元和元年の頃、安樂庵咄を所望いたし、承り候へば、別しておもしろく存ずるに付いて、御書集め候ふて、草子にいたし給ひ候ふやうにと申し候ふ處、一兩年過ぎ八冊に調へ給ひ候。紛失可仕かと存じ、奥に書付け置也。

寛永五年三月十七日

重宗

輕口浮瓢簞

探華亭羅山編

○謎つんぼ

あら玉年のをむかへ、幾千世ながき春の日のつれ〴〵なる折から、二三人寄合ひ、謎をかけて遊ぶ其の中に、いかなるむづかしき謎にても、奇妙に解く男ありて、さま〴〵の謎もかけ盡したる時、才覺なる人思案して、古鼬とかけて何と解くといへば、彼の謎解く男、いろ〳〵工夫して見れど解けず、是れは一番流すといふ。謎かけたる者のいふは、古鼬とかけて、つんぼと解くといへば、彼の男しば

らく思案して、古鼬をつんぼとは、どうも義理が聞えぬといへば、さあ譯が聞えぬゆゑつんぼと解くといふた。

○金といふ字

さる所の會所にて町ぶるまひありしに、ある人のいふは、なんと文字といふ物はようした事でござります。咄といふ字は口篇に出ると書きます、いづれ口から出次第なものなればといへば、宿老申さるゝは、それよりは金といふ字は、人の主と書きます、よう理窟をせめた物でござらぬかと云はるれば、皆々尤もの義でござりますといふ時、少し小文才のある人さし出でて、なるほど草で書く時は人の主と書きますれど、眞で書く時は人の主とは書きませぬといへば、

宿老ぬからぬ顔で、いや〳〵しんではいらぬ物でござるといはれた。

○刀のきつさき

さる所に臆病なる劍術者あり、ある時弟子を集め申さるゝは、惣じて世俗にも申すごとく、男は外へ出れば、七人の敵があると申せば、おの〳〵かたも常々刀のきつさきのやうに、氣を持ち給へと申さるれば、皆々刀のきつさきは鋭なるものゆゑ、男も氣をするどに持ちて、臆病ならぬやうに致し申せとの御事ならん、尤もな義でござりますといへば、師匠云はるゝは、おの〳〵かたは何と合點されたゝ、刀のきつさきは跡から出て、先へはいる物じやといはれた。

○はなしの種

さる所に、萬づ種物ありといふ看板を出しければ、こまらしてなぐさまんと、二三人づれにて行きて、咄の種がござるかといへば、種屋の亭主、なる程ござります、是れへ御通り御覽下されよと、奥へつれゆき、藁ぶきの小家の障子を開けて、是れが咄の種でござります、むかし〳〵ぢいとばゞとが居られました。

○石塔のうなづき

ある人、久しく馴染をかさねて逢ひし女郎、かり初に煩ひしが、終に本腹なく死しければ、歎きの餘り我が頼み寺へ石塔を立て、佛事供養かたのごとくいとなみ、毎日々々彼の石塔の前に行きて、過し事どもを數へ立てゝかなしみけるが、ある日例のごとく石塔にむ

かひてさま〳〵の事をいひけるに、ふしぎや此の石塔うなづきける。扨は我がこゝろざしの通じけるかと、泣く〳〵歸る道にて知る人に行き逢しが、彼の人いふやう今の地震はさつい物の。

○下女の脈

ある所に、我が身をめつたに卑下する下女あり。其の家の内儀風を引きたるとて、常に念頃なる醫者を呼びて脈を見てもらはるゝついでに、下女を呼びて、そなたも心もちがすぐれぬといやる、あなたに脈を見てもらひましやといはるれば、彼の下女例の卑下して、なんの私ら風情に脈がござりましよというた。

○鬼のより合

今年地獄も殊の外衰微せしゆゑ、數多の鬼ども談合して、風の神を頼み、風をはやらしけれども、世間の醫者の匙加減にて死するものなきゆゑ、鬼ども又々より合して、此の上は娑婆の醫者共を取殺さんといへば、中にも分別らしき鬼がいふやう、いや〳〵それは無用なり、あいらを生けて置けばこそ、間にはよい代物が來るでないか。

○木戸の念佛

芝居の木戸のもの熱病を煩ひ、いろ〳〵療治すれども叶はず、今ははや世に頼みすくなう見えければ、一門一家打寄り念佛をすゝむれど、芝居の事を譫言にいひて念佛を申さねば、皆々せんかた涙に

くれ居たる折から、座元見まひに來て、いで〳〵念佛申させて見すべしとて、病人の耳に口を當てゝ、是れ六兵衛、また御停止じやといふや否や、病人、なむあみだ佛といふた。

○千兩の異見

何を見ても直打をする癖ある人、無二の友達同道にて、參會に行きたる道すがら、友達いふやう、けふは晴の座なれば、例の癖をたしなみ、座敷に出でである道具萬事に直打せらるゝなといへば、彼の人いふやう、貴樣の異見かたじけなし、我れも惡い事と知りながら、是非もなき事なり。此の癖がなほる時は、貴樣の異見が千兩にも買はれぬと、すぐに直打をしてのけた。

○非人の僭上

身代をつかひはたせし息子、一家一門にも見かぎられ、終に乞食となり、下寺町の野はづれに寢て居たる折ふし、馴染の女郎通り合せ、此の體を見るより、さても〳〵いとしほや、我れゆゑかゝるあさましき形にならんしたかと、すがり付きて泣き出せば、こりやこりや聲が高い、おれは敵打に出て居るというた。

○はうろく酒

身代を酒に飲つぶしたる男、江戸へ行つて、焙烙を荷ひ賣して渡世を送り居たる折から、以前の酒友達、是れも家財を飲みあげて、江戸へ拵ぎにくだりしが、日本橋のつめにて行きあひ、是れは〳〵

めづらしやと、互に飲みあひし昔を語りあふ。咄の内より彼のはうろく屋、はうろくを三枚取つて地に打ちつけ、微塵になしていふやう、貴樣に酒をふるまはんと思へども、折節賣溜の錢なし。此のはうろく一枚が拾貳文づゝなり、三枚にて三拾六文が酒をふるまふ心にて打ち破りたりといへば、扨て〳〵昔わすれぬ心ざし、千萬忝しといふより早く、脇指をするりとぬきてふりまはし、醉狂の心じやというた。

○芝居の寶もの

つひに芝居を見ぬ田舍者、初めて歌舞伎芝居を見て宿へ歸れば、宿の亭主、なんとおもしろござりましたかと問へば、いやはや今日

は散々の事でござつた。先づ芝居へはいると其のまゝ、役者仲間に何とやらいふ寶物が見えぬと云うて、一日が間まぜかへして、肝心の狂言は見ずにもどり申したというた。

○刀の銘

波平行安といふ刀の銘よみがたく、ある儒者の所へ讀みにやりければ、波平かにして行くこと安しと讀みて來る。刀の銘にはどうやら可笑しい事じやと、頼み寺の和尚へ讀んで下さりませといへば、和尚見て、是れは波平行安じやが、どなたの戒名でござるといはれた。

○妾の知行

ある殿様の家中に、知行五百石取る侍あり。妾を置きたく思へども、此の内實世にまれなる悋氣者なれば、いかゞせんとさまゝ思案して、内實にいはるゝは、今日殿様の仰には、知行百石より一人づつ妾を置くべしとの御意なり。身どもも五百石なれば、五人の妾を置かねばなるまじと申されれば、内實聞きて、殿様の御意は是非なし、然らば知行四百石をさし上げて、百石取に成つて、わたくしひとりで濟しなされといはれた。

○火喰

夜あるきするのら息子あり、親父呼び付け、おのれ毎晩々々出あるき、それを異見すれば、いつも友達への義理立といふが、親のい

ふ事は聞き入れず、友達のいふ事は何事によらず聞きいれる所存と見えたり。友達が火を喰へといふなら、火でも喰ふかと申さるゝ。息子いふやう、時の品によつたら喰ふまい物じやござりませぬといへば、親父下女を呼びて、火を持つて來いと申さるゝゆゑ、下女も氣毒ながら、十能に火を入れて來れば、親父息子に、はや〳〵喰へとせつかれて、息子下女にいふやう、是れおすぎ、これでは喰ひにくい、太儀ながら醤油をかけてたもというた。

○淨土法華の犬あらそひ

淨土寺と法華寺と殊の外中惡く、法華寺に犬を飼ひて法然と付ければ、淨土寺にも犬を飼ひて日蓮と名付け、たがひに謗りあひけるが、兩方の犬かみ合ひ、淨土の犬かみ負けるゆゑ、法華の方いさり出し、なんと見たか、こちの法然には米の飯を喰して置くゆゑ、強い所を見よと笑へば、淨土の方いふやう、其の善の事じや、こちの日蓮には屎を喰して置くゆゑ負けたのじやというた。

○むかしの恥

紙くず買、ある裏屋の女房ひとり居たる所にて、紙屑を買ひけるが、其の籠の中に琴の爪三つありければ、紙くづ買いふやう、琴の爪を持ちて居給ふからは、おまへはよい衆の果なるべし。世につれてかゝる暮をなさるゝ事、さりとはおいとほしやといへば、女房いふやう、なるほど私も以前は美々しう暮した者でござんした、其の

琴の爪もちかい頃まで、五つそろうて持つて居ましたにというた。

○後生の物ずき

酒好な者と、色ぶかい男と、肴好なものと、三人より合ひ、酒ずきがいふやう、おれは死んだら備前徳利になりたい。不斷腹の中に酒が絶ゆるといふ事がなければ、是れより上の樂はないといへば、色ぶかい者がいふやう、おれは紅裏になりたいと思ふなり、常に女の肌を離れねば、是れより外の事はないといへば、肴好がいふは、おれはまた鯛になりたい願なり、あの鯛といふものは、煮ても燒いても、あれよりうまい物はないというた。

○にはか醫者

いろはもしらぬ米踏の六兵衛が、米臼足庵と名を付けて醫者となり、あけくれ呼びに來るかと待ちかけて居たり。ある日表に頼みませうといふ、すは呼びに來たると、自身いそ〳〵立ち出てて、どなたからでござると問へば、使の者扇箱をさし出し、私はあちら町の石塔屋でございます、此の以後お頼み申しますというていんだ。

○眞言のふしぎ

佛法はなしの中に、眞言宗の人いふやう、私が宗旨に降伏の法と申して人を祈り殺し、また祈り活す事がござる、なんと奇妙な法ではござらぬかといへば、ある人いふやう、祈り殺す事はむづかしいが、祈り活す事は我等でも致すといへば、皆々それはどうした法て